闇の絵草紙

必殺血汐舞

激闘編

作画・植木金矢

江戸の夜風はレトロに新鮮。恋慕無情の血汐が舞えば、燃えて許したこの身がうずく。女影、闇に飛び白刃一閃。白磁の秘肌を朱色に染めて淫戯無頼の悪を斬る霞切りのお吟。天保の改革に揺れる八百八町、老中水野忠邦と妖怪鳥居耀蔵の悪虐非道に挑む必殺テクの競艶に謎の能面武士もからんで物語は二転三転。闇の元締めvs.赤不動の玄沢の暗闘は、多彩な登場人物を巻き込んで紅蓮地獄のクライマックスへ……妖艶大江戸ロマネスク、時代活劇の決定版！

カバーデザイン／鈴木編集事務所

闇の絵草紙

必殺 血汐舞

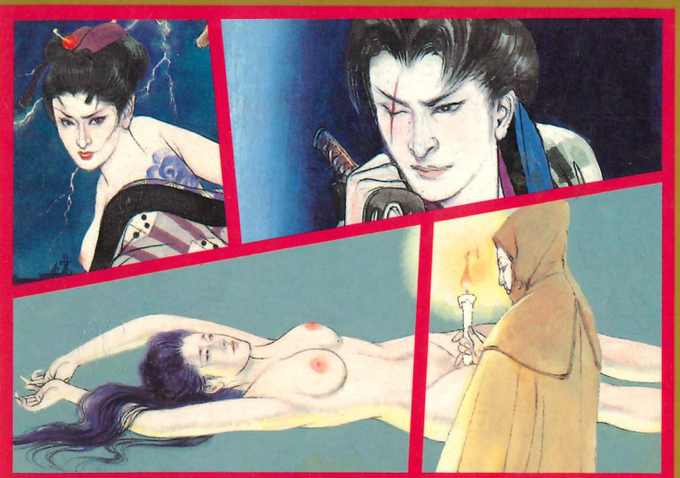
激闘編

作画・植木金矢

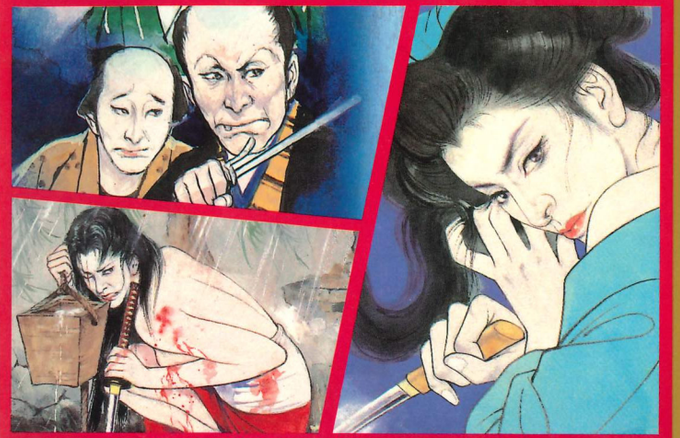
闇の絵草紙 必殺 血汐舞 激闘編

作画 植木金矢

あき書房



あき書房●定価500円



ISBN4-900428-18-3 C0179 ¥500E

●主な登場人物

霞切りのお吟／闇家業の女仕掛人。霞のごとく蝶を舞わせて人を仕留める幻惑技をつかうこの物語の主人公。闇の元締め徳右ヱ門の仕事を受けている。艶熟の柔肌を初めて開いた相手、檜九十郎への思いを秘めて血汐修羅場の江戸を行く。

新三／お吟の殺しのパートナー。

今戸の徳右ヱ門／お吟たちを取りしきる闇の元締め。

檜九十郎／夕姫の用心棒。お吟とは浅からぬ因縁が。

濡れ髪のお柳／同じく夕姫の用心棒。お吟の白刃に片目にされ、お吟の命を狙うが、やがて意外な事実が……。凄絶美で九十郎を慕う。

夕姫／淫隈を極める多情乱心の妖魔の表情の陰には、悪政へのはかないレジスタンスの女の悶えが。

三村庄左衛門／夕姫の忠実な家臣。

矢部駿河守／水野、鳥居の悪政に対抗する一方の雄。徳右ヱ門グループをつかって起死回生をはかる。

鳥居耀蔵／水野路線にのって私腹を肥やす希代の妖怪。

水野越前守／華美風俗を禁止した改革強行の大立て者。

神崎甚内／同心。お吟に首ったけ。人一倍のスケベだが憎めない男。

でんでこの松／甚内の手下。

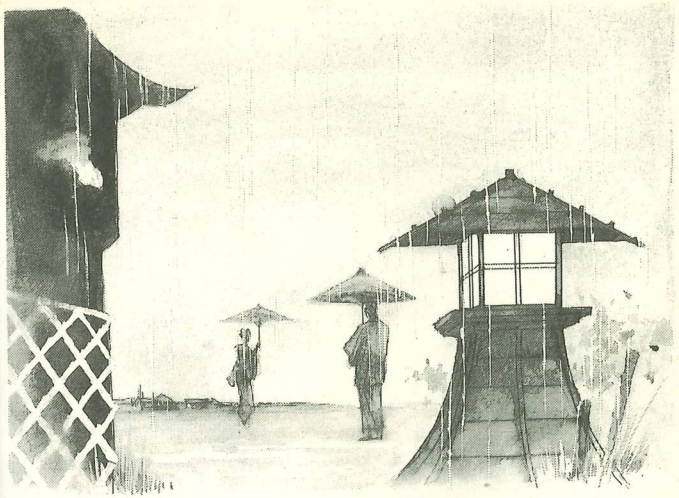
「お吟姐さん　これも仲間の
掟　殺りたかねえが　殺らな
きゃこっちが殺られるンだ
覚悟しなッ」

「あたいがお吟と姉妹だって
嘘っぱちだ　何を今更　あた
いがお吟なんかと姉妹である
はずがねえ　徳右エ門のバカ
野郎ッ」

「九十郎！　新三！
お柳！　そして徳右エ
門！　みんなあたいを
助けてくれたけど
……これから先どう
生きろというのさ
……
あたいだって　あの花
火のようにぱッと開い
てパッと消えてしまい
たいよウ……」

必殺血汐舞

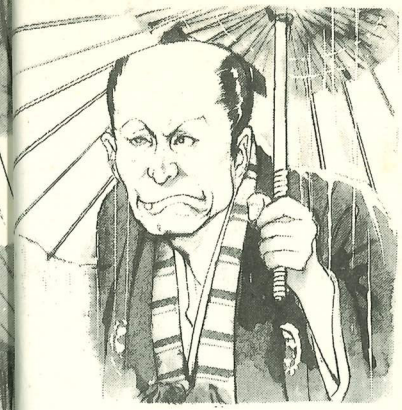
「爺よ
人を斬るのは今が初めて
この世に未練は何もない
……さらばじゃ…」

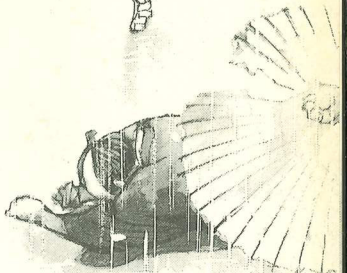


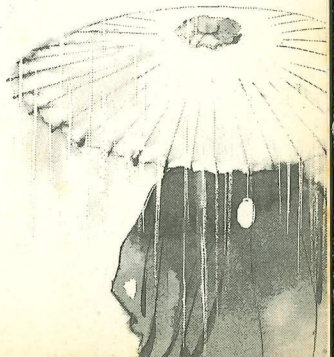
ザーッ
「甲州屋さんですね」
「う？」
「死んでもらいますよ」
「なんだとッ！」
パッと女の手から胡蝶と見まがう白いものが烟る雨の中に霞と舞った。

天保十二年大御所家斉（イエナリ）の死後御側用人、水野美濃守失脚　代わって老中水野越前守忠邦が実権を握るや妖怪鳥居耀蔵を謀臣として耆旨禁令（しゃしきんれい）を強行　世は天保改革の波に揺れていた。

「甲州屋さん気
の毒だけどこれ
があたしの稼業
なンでね」
「ううッ」







「雨の中で蝶が舞う　いつもながら見事な仕事ぶりだな　霞斬りのお吟（ぎん）」

「おや誰かと思ったら神崎の旦那　相変わらず犬のように鼻が効くんだね」

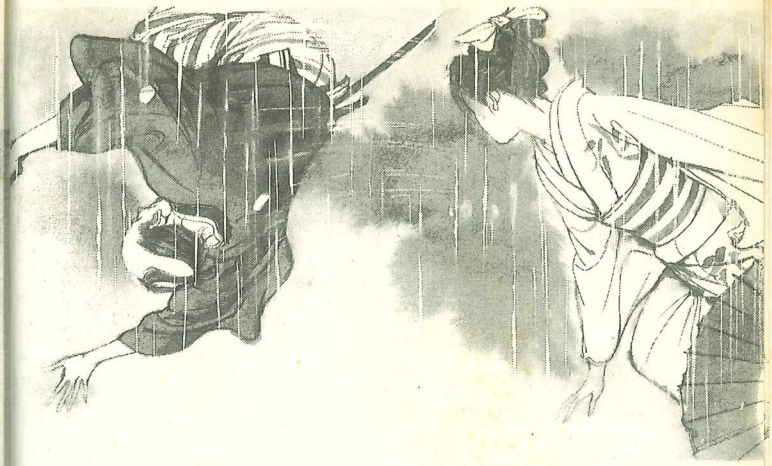
南町奉行所同心神崎甚内の目が笑って

「フン　闇稼業の仕掛人が俺の目を逃がれようたってそうはいかねえ　神妙にしろいお吟ッ」

素早く神崎の手がお吟を羽交い締めに

「おや旦那妙なところに手が入るンだね」

「う……ウン……」

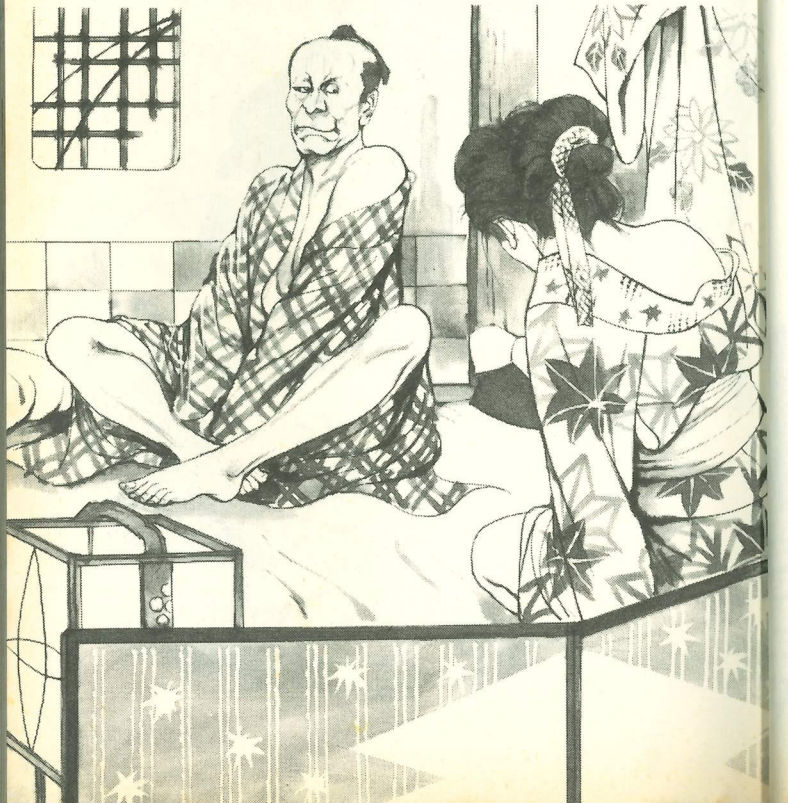


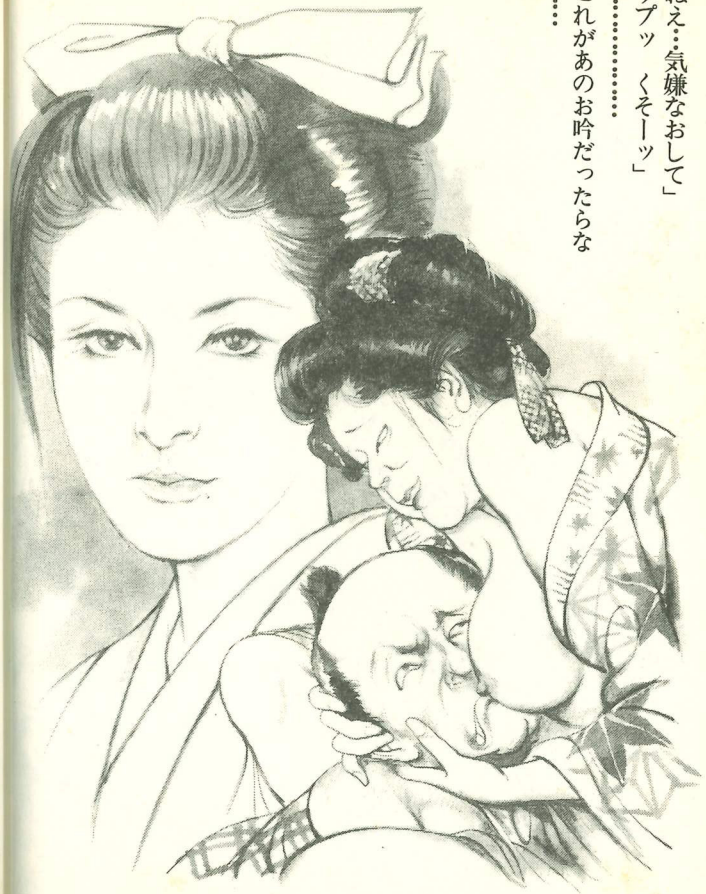
「ターツ」
「おッととと……」
ストーン
神崎の足元にポトリ　女が落とした光るもの一つ
「おっ　二分銀」
「旦那　今夜はそれでケコロ(私娼)でも買ったほうがお似合いだよ」
白い笑顔が雨の中に消えていく

「フン…いつ見てもぞくッとくるいい女だぜ」
「旦那　いいんですかいこのまま見過して」
「いいってことよ　ああやって泳がせておけばこうして小遣いには不自由しねえってことだ」
「松　ついてきな　これからおめえにも女を抱かせてやるぜ」
「ホント…ありがてえ」

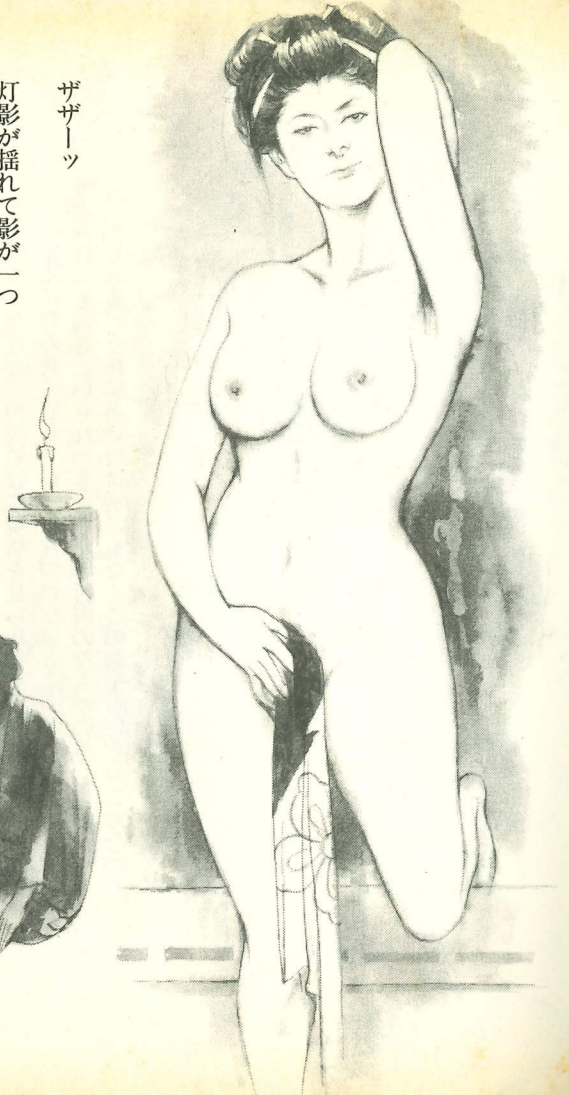
シーコシコ シーコシコ
「歯っ欠けの旦那、いいかげんにしてよ
もう しつっこいんだから…」
「ナなんだとッ 俺は客だぞ」

「客に向かって歯っ欠けとはなんてことを言やがる」
「だってみんながそういうんだもの」
「おきやがれおもしろくもねえ この抜けた歯はな さる大捕物の折りに受けたいってみりゃ誉れの向こう疵よ 軽くみられちゃ傷つくぜ」
「あら旦那すねてンの……」





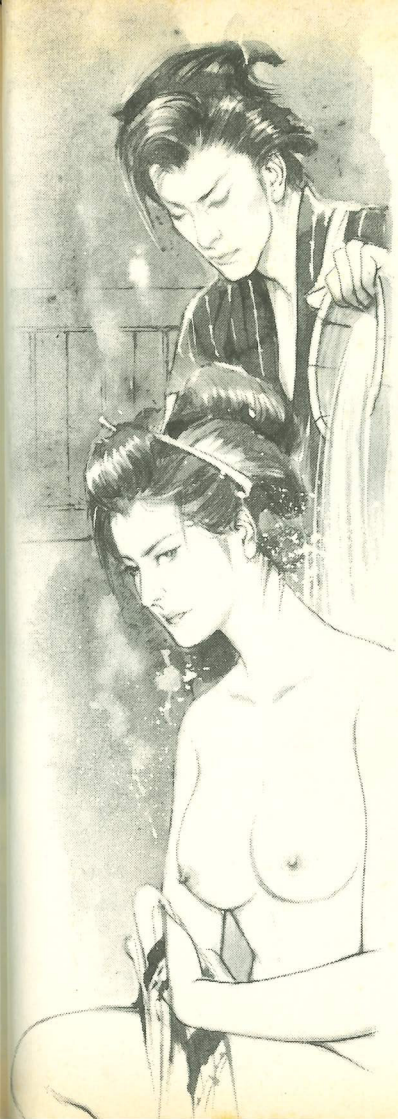
「ねえ…気嫌なおして」
「ウプッ　くそーッ」
……
これがあのお吟だったらなア……



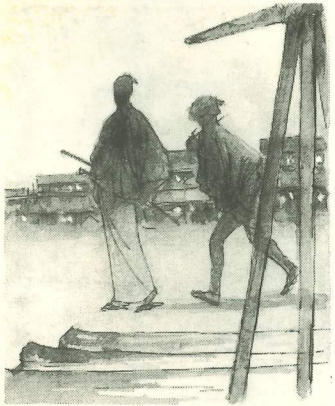
ザザーッ

灯影が揺れて影が一つ
「姐さん背中を流しましょうか」

「新さんかい…折角だから頼もうかね」
「どうでした今夜の仕事？」
「甲州屋はうまく仕留めたけど　神崎の奴に現場を見られちまってね」
「あいつは山犬みてえに鼻の効く奴さ、いつか片づけないとこっちの命とりになりますぜ」
「まあいいさ　あれでも同心というれっきとした奉行所の役人なのさ　生かしておけば闇の仕事の役に立つこともある。それにあいつは柄にもなくこのあたしにぞっこんなのさ　役人に惚



れられてもゾッとしないけどね　ときには目こぼしもあって助かることもあるのさ」
「ところで姐さん　例の能面の仕事どうします」
「汐見屋さんからまた頼みにきたのかい」
「娘をなぶり殺しにされた恨みを晴らしてくれと」
「汐見屋の気持ちはよく分かるけど　探ってみると意外と根が深いんでね、その一件うかつには手が出せないでいるのさ」



「旦那ゆうべの合娼（あいかた）どうでした」
「フン　カスをつかンじまったよ　客のおれに歯っ欠け　歯っ欠けってぬかしやがる」
「世間じゃ旦那は歯っ欠けの甚内で通っていますからね」
「フンやせても枯れてもこの神崎

甚内　南の定廻り同心というレッキとしたお役人さまだぜ　そのおれをコケにする奴はいまにこっぴどい目にあわせてやらにゃ　ところで松　ひとのことはどうでも　おめえのほうはどうだったンでえ」

「へッへへ…それが旦那の前だがバカもて……あっしを一晩中寝かせようとはしねえンで　もう参った　参った」

「ウソつきやがれッ」

「へッ」

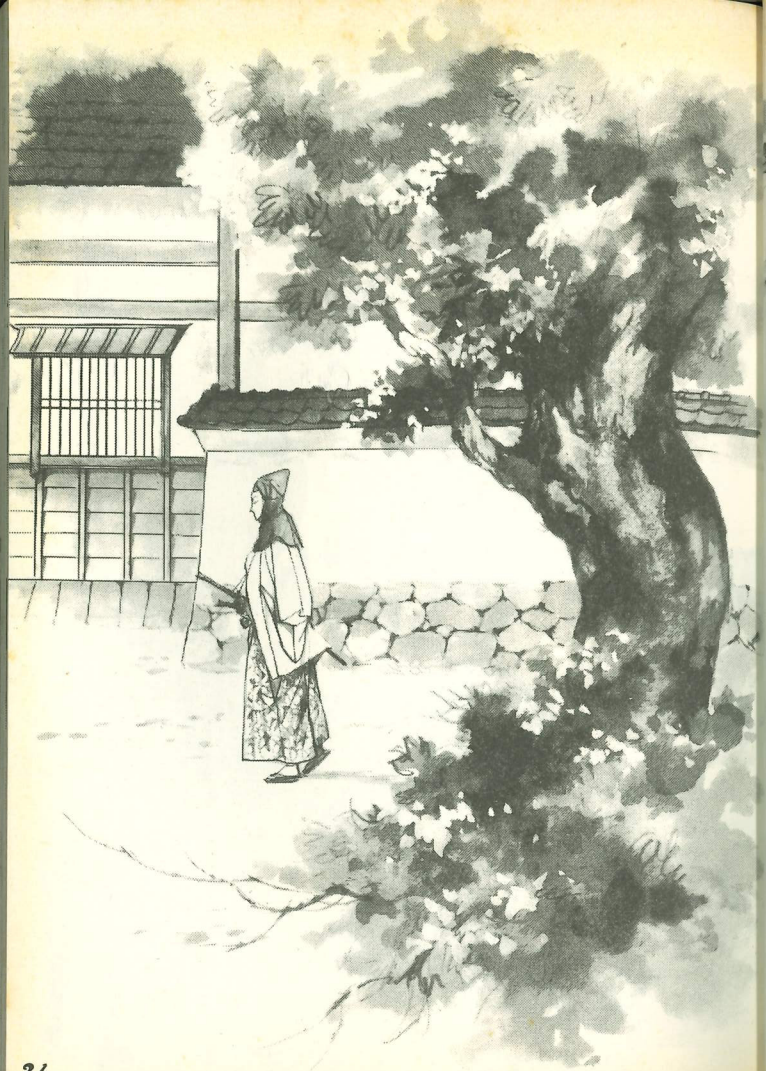
「てめえがそんなにもてるわけがねえ」

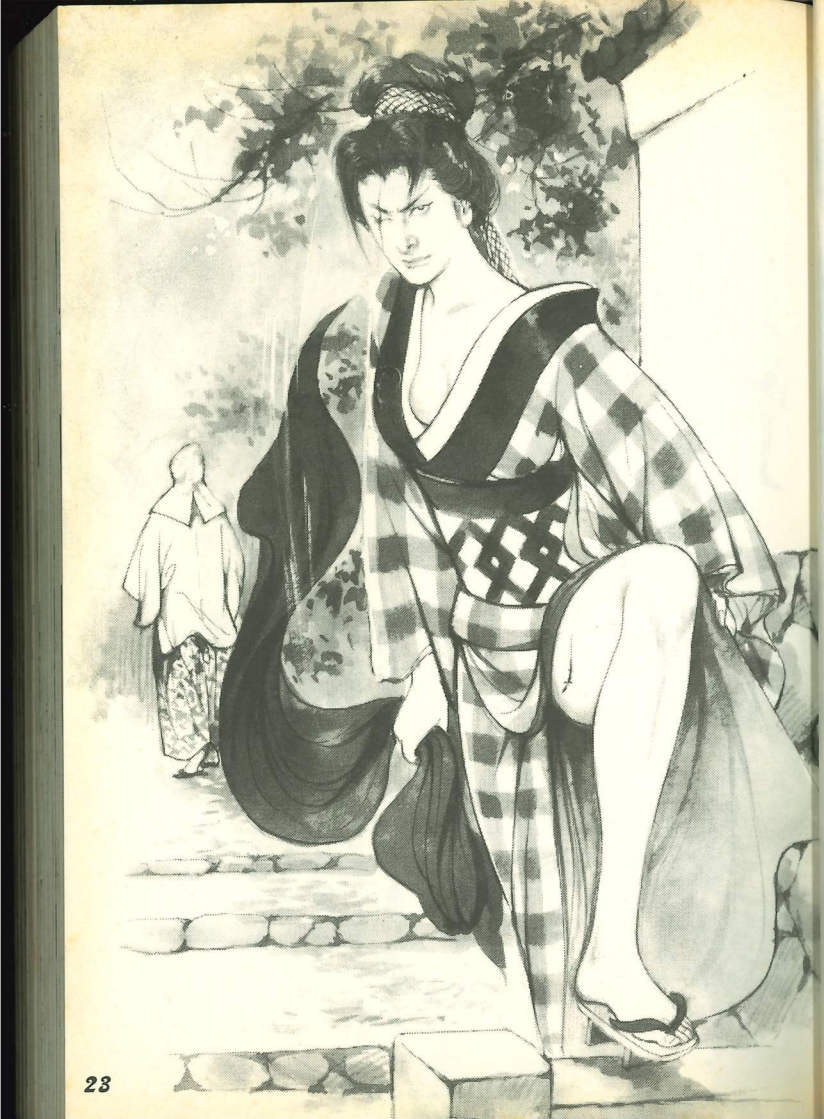
「へへへ　図星…近頃の女郎はタチが悪い　まわしをとりやがってこっちは一晩中膝小僧を抱いて待ちぼうけ　おまけに隣の部屋から妙なヨガリ声がきこえてきやがって　もう悩まされっぱなし」

「あんまり頭にきたから　いったいどんな野郎が女を責めていやがるのかみてやろうとソーッとのぞいて見て驚いた」
「どうしたい？」
「女をヨガらせていたのが、能面をかむっていやがったンで」
「ナニ能面だって!?」

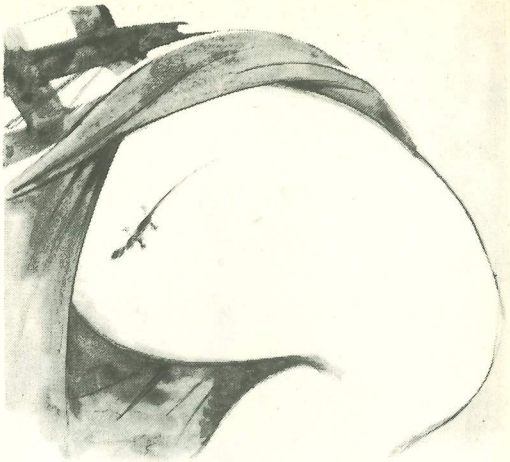
「おい松　あそこをみろ　おめえが女郎屋でみた能面の侍とはあいつのことか」
「へ…？」

「あっ…あいつ　あいつだ　旦那　確かにあの侍ですぜ」
「フン　能面をつけて女をヨガラせるたァキザなことしやがる　いってえ能面の下はどんなシャつらしているのか確かめてやっか…松　後をつけるンだ」
「ヘイ」





「お町の旦那　あのお方の後をつけてなにを探ろうてんだい　妙な詮議をすると笠の台が飛ぶよ」
「シャれた台詞をきかせてくれるじゃねえか。そういうおめえはいってえどこの馬の骨だい」
「フンこんどはあたいの詮議かい」
「よくみておきな　ひと呼んで濡れ髪のお柳用があるなら奉行所でもどこでも出張ってやるよ」
「!?……」

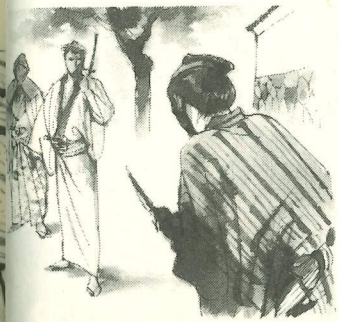


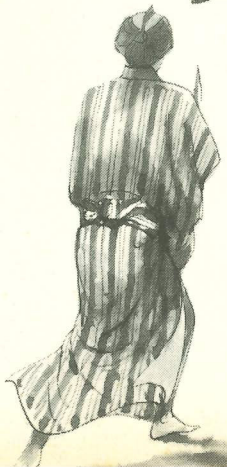
「みたかい松　あの女のふとももの入墨を」
「とんだ毒気にあてられましたね」
「ああゆう女に出くわすのも同心稼業の役得のうちかな　片目の傷にゃびっくりさせられたが　ムッチリと太ももの白い肌がたまらなかったなア　ああゆう女を一度裸にむいてみてエ」
「またすぐそれだ　旦那の考えはいつもゲスでいけねえ」
「なにを言やがる　てめえは上品な若様とでもいうつもりかよウ」

「あっ　旦那どこへ？」
「知れたことよ　このまま指をくわえて見逃したんじゃ　南のスッポンと言われた俺の名がすたらあな」

「スッポンに歯っ欠け　旦那もいろいろと仇名がおおござんすねえ」

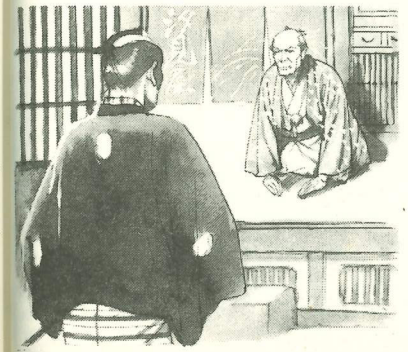
「町人　このお方に刃物を向けてどうするつもりだ」
「なぶり殺しにされた妹の敵をとってやるのだ　殺してやるーッ」
「痴者ッ！」浪人の手に白刃が一閃！
「ウウーッ」





「旦那あそこにひとが倒れていますぜ」
「いってみろ」
「こりゃ汐見屋の跡とり息子ですぜ」
「汐見屋の息子がいったい誰に？」

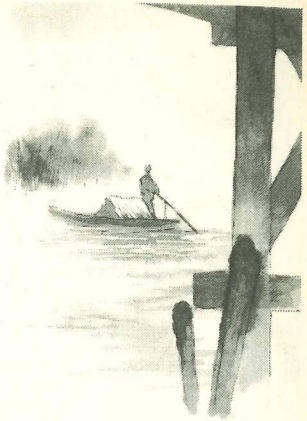
「神崎様　この度はどうも」
「ナーニ　こっちはこれが仕事だ　改まって礼を言われることァねえが　ホシは必ずあげてみせるぜ」
「息子の幸太郎は能面の武士に斬られたんです」
「ナニ　能面だって」



「幸太郎には　雪路という妹がおりまして　親の口から申すもなんですが　小町といわれたきりょうよしで　そこで見込まれてか　取引先から　さるお屋敷の主（あるじ）のお茶の相手をしてくれぬかとたっての頼みに断りきれずに　出向きました　そこの主（あるじ）から　無体なことを強いられて　拒んだところ　娘は無残な死体となって返されました」

「娘が相手をさせられたのは　部屋の中でも　何故か　能面をつけた武士だとのこと」
「フーン」
「お役人に詮議をお願いしても一向にお取上げになっては下さいません　人一倍　妹思いだった幸太郎が口惜しがって　おれが能面武士を殺してやるといって……」
「それで逆に斬り殺されたってわけかい　相手がどんな身分の者かあ知らねえが　人を虫けらみてえに殺していいッてことぁねえ　この件おれに任しておきな」
「それでは旦那が　お取り上げになって下さるので　ありがとうございます　どうか　息子と娘の敵(かたき)をとって下さい　これは些少ではございますが鼻紙代に」
「いや…役目でやることだから　こうゆうものは……」

「チッ　うちの旦那も　カッコつけねえでさっさと貰っておけばいいのに」
「ウッフン」
「旦那　いくら入ってました　いくら」
「何が」
「またトボケちやって　貰ったんでしょ」
「やっかましいっ」
「おーい　神(かん)の字」と後ろからの声
振り向いてみると同じ巻羽織りだ
「これはこれは角倉さま」
「出しなよ」と手を出す
「えっ　なにをです?」
「見てたんだよ　汐見屋からの心付け役目にひっかけて金を貰うのは賄賂(まいない)になるンだぜ　賄賂で首をとばされた同役が何人もいたのを　おめえも知ってるだろう　素直に出しな　おれが預かっておく」
「は　はい」
「まあ　これからもお役目大事にな」
「あきれたね　あいつ下役の上前をはねていきやがったぜ」
「近頃の上役はタチが悪い」



「ええ　お千代　寄っていきねえ　そこに立っていると　辻番から棒が出るによう」

「雨が降るか風が吹けば　永久橋の下に船をつけるによう～」

「ポチャポチャのお千代だによう」

船饅頭（私娼）別命お千代船ともいう

客を拾うと船は永久橋から中州をひと廻りする

その間に客は船板を枕に女を抱いた

鼻はお千代　一時の夢

三十二文水上の泡

価は三十二文　当時そば一杯が十六文だった

「なあ　松の字　こう陽気がよくなってくると船饅頭も乙だなあ」

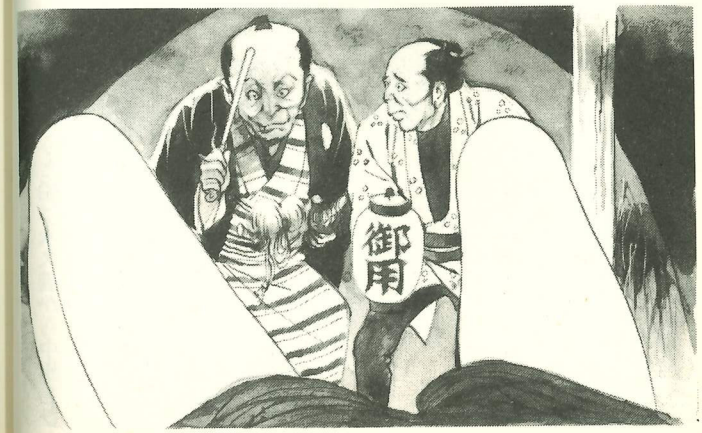
「またァ　旦那はすぐそれだ　スケベ」

「なんか言ったか」

「いいえ」

「旦那　どこを見てるンで」
「あ　あ……」

「驚きましたね　心中の片割れが汐見屋とは　それにしてもちょっとおかしくありませんか廻船問屋の主がよりによって船饅頭の女と心中するなンてそれに旦那と違って汐見屋は堅物で通ったお方だ」

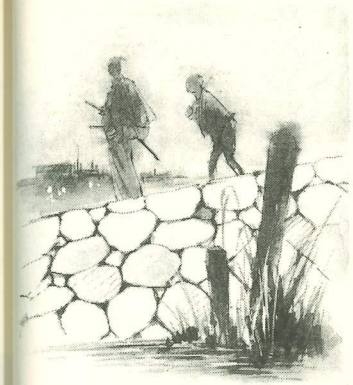


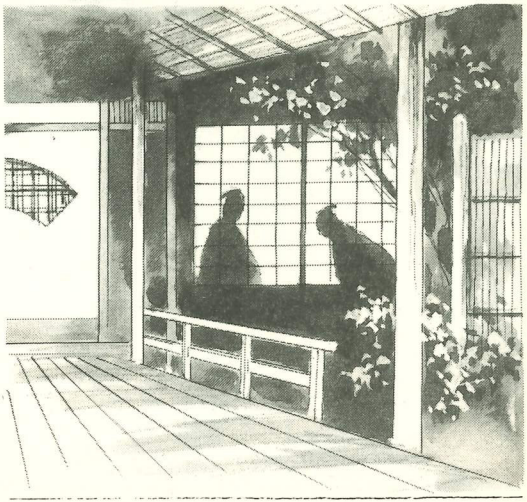
「なンだと」
「いえね　この心中にはどうも裏がありそうだってことで」
「ウン　おれもそう思う」

「おーい　神の字」
「旦那　またあいつのお出ましですぜ」
「今度この辺りの見廻りはおれの持ち場になったんだ　おめえにウロチョロされたんではおれの立場がなくなるンだよなぁ　ここはおれに任せて他を見回ってくれ」

「それになぁ　汐見屋のことで首をつっこむのは止めたほうがいい　これは上からのお達しでもあることだ」

「どうも気にいらねえなあ　あの角倉って奴は」
「旦那　あいつはこんどの心中の件で何かからんでいるような気がしますね」
「おめえもそう思うか　おれもどうも匂うンだな　あのゲジゲジ野郎が」





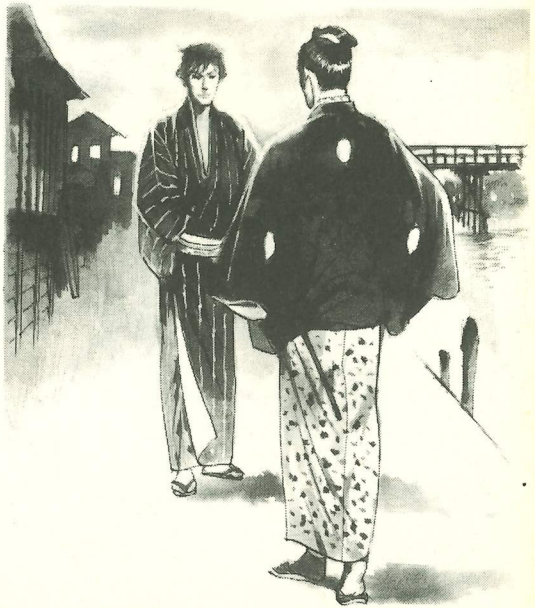
「汐見屋の一件　なんとか片をつけました」「ご苦労だったな」
茶屋の一室で角倉ともうひとつの影

「ウロチョロ嗅ぎまわるバカ同心がおりまして　骨を折りました」
「ま　今夜はゆるりと過ごしてくれ　お目当ての芸者がおるんじゃろう」
「これはどうも　恐れ入ります」

「角倉の旦那　これで汐見屋の商売敵だった加賀屋さんはホクホクですね」
「商売のことはおれは知らんただ上からいわれるままに勤めているだけだ」

〽衣衣(きぬぎぬ)の～～
たまの逢う瀬を
しっぽりとお～～

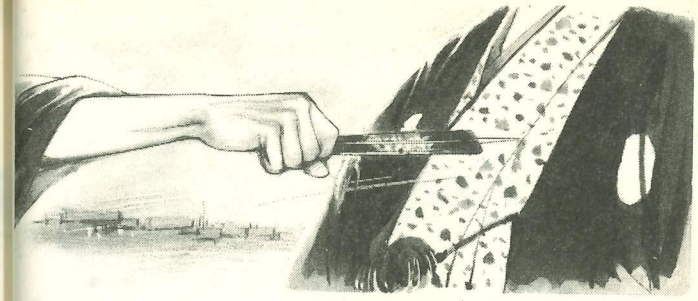
「フフ　蔦奴…　可愛いい奴…」
女の柔肌を思い出しての千鳥足……
つッと立塞った男



「角倉の旦那　今夜はお楽しみでしたね　お楽しみついでにこんなのはいかがですか」
サッと目の前に開かれた扇面にあぶな紙が

「むっ」
「お嫌いじゃないでしょう」
プシュッ
「うっ！」

「おめえの殺ったこの角倉ッて奴はおれの上役だがおめえが殺んなきゃあおれが殺してやりてえと思うくれえにいやなゲジゲジ野郎でなそんな奴でも役人は役人だ役人を殺ると後の詮議がうるさくなるぜまあ今夜のところはおれが見ねえことにしておくだがなこの付けは高くつくとお吟にそう言っておきなフフ……」



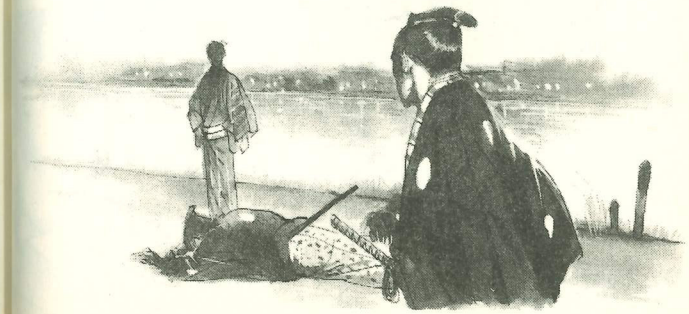
「見たぜ扇売りの新三」

「おっ……」

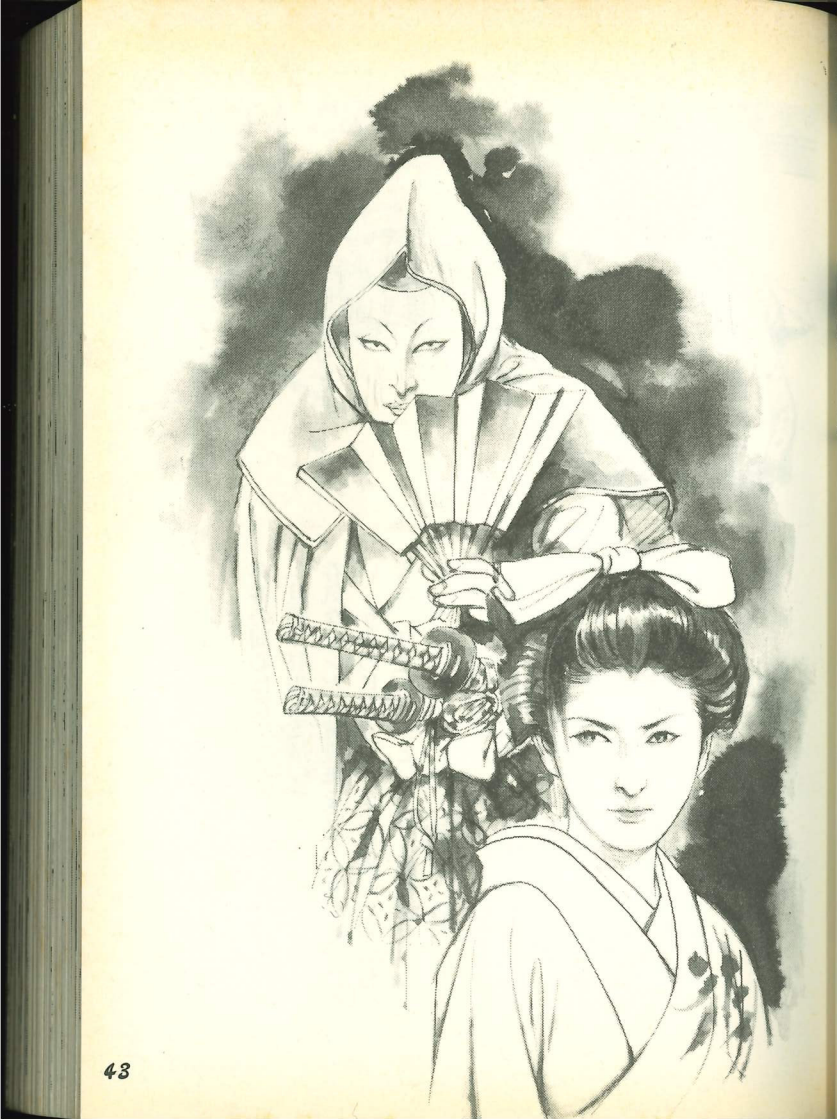
これは神崎の旦那…旦那に殺しの現場を見られちゃ仕方がねえや……どうです旦那にもお見せしましょうか」

「おっとと……」

おれもその手のものはきらいじゃねえがその後で心の臓に一突きグサリとやられるのはご免だぜ」



「新さん　現場を見られたのかい」
「姐さん　申しわけねえ」
「まあいいさ　どうせ神崎の奴　あたしの体が目当てなんだから……
それにしても　汐見屋の殺しに同心が絡んでいたとはねエ……あたしはてっきり　商売敵の甲州屋の仕返しかと思っていたけど……どうやらこれであたしも能面の件に引きずりこまれてゆきそうだね」
「姐さん　やっとその気になってくれましたか」
「新さん　でも　迂闊な動きはできないよ」
「わかってます」



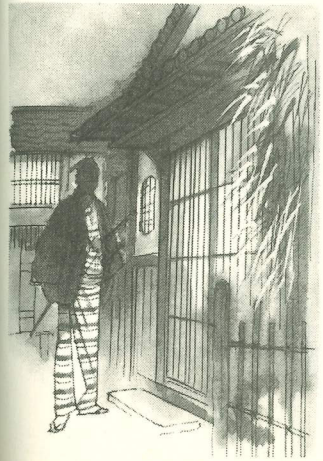
非番の同心は役宅で長閑かな一日だ
「旦那　昼飯の支度ができましたよ…へへ…呑気なもンだ　黄表紙を見ながら昼寝ですかい　うちの旦那もロクな本を読んじゃいねえなあ　知性が低いというか　教養が足りないというか……いててッ…旦那ッ　いきなり向う脛を足払いとはひでエッ」
「フン　その猥本は　てめえが貸本屋から借りたものだ」
「ヘッ…でしたっけ　ケケッ　あっしも知性が低い」
やがて主従向き合って膳を囲む

「なあ松の字　こうやって野郎同士で鼻をつき合わせて飯を食ってるのも味気がねエなあ」
「だから旦那早いとこ奥方を迎えて下さいよ　だれか世話をしてくれるひといないんですか」
「いねえこともねえんだが　どうもうまくいかねえ　こっちがよくても先方がなあ」
「旦那じゃ無理もねえ」
「なンか言ったか」
「いえね　旦那　例のやつね　もっとスゴイのがあるんですがね」
「どこに」
「ヘエ　扇売りの新三の家に」

「新三か…あいつにゃ貸しを作ってあるんだ　あとで顔を出してみッか」

「旦那　今日のお供は」
「たまの非番だ　ゆっくりしてな…おめえレコはいねエのかい」
「へエ　旦那と同じで」
「何を言やがる　おれにはな　だれにも話しちゃいねえが　れっきとした意中の女がいるんだよ」

ヘン
意中のひと…分かってますよ
お吟でしょう　あきれたね
うちの旦那も惚れるにこと欠いてあの女を選ぶなンて



「新三　いるかい」
「これは神崎の旦那」
「おめえのところにあぶな絵のスゴイ扇面があるときいてきたんだがな」
「旦那　ご冗談を」
「そうかい　こないだの晩　角倉さんに開いて見せたあの扇はどうしたい」

「旦那　ああゆうものはメッタに開いてひと様にお見せするもんじゃありません」
「だよなァ　そいつを見せられて命を落とした奴は気の毒だ」

「角倉の件　あれはおれの胸にしっかり畳んであるぜ」
「……」
「ところでお吟はどうしたい」
「姐さんは今　他出で」
「帰ったら　今夜おれが例の出会茶屋うれし野で待ってるって言っておきな　来る来ねえはそっちの勝手だがな」

「くそっ　スケベ同心め」

「やっぱり来たね　神崎の奴」
「姐さん　すまねえ　あっしのドジで…いつかあいつは俺が」
「まだ手出しは早いよ　生かしておけばこっちの役に立つこともある…まあいいさ　今夜は適当にあしらってくるから」
「姐さん　ほんとにゆく気で」
お吟の笑顔が闇の中に消えていった

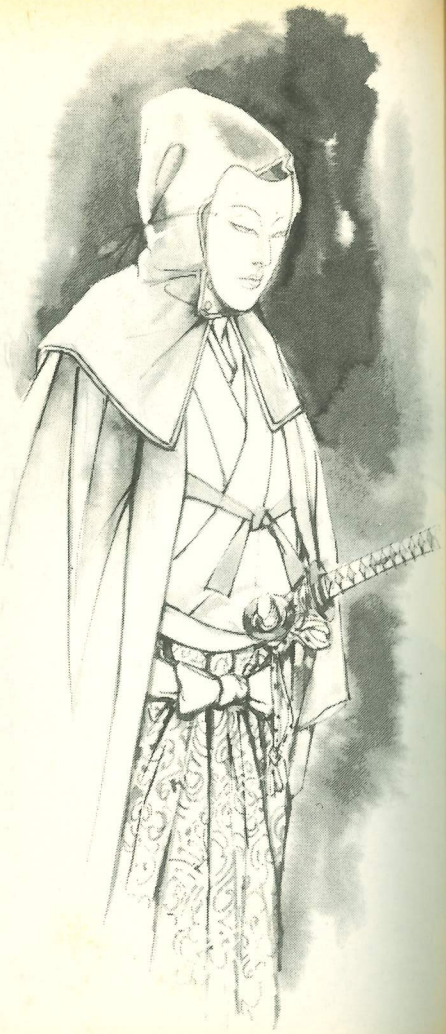
「お吟　やっぱり来てくれたか　嬉しいぜ　まあ一杯いこう　魚心あれば水ごころってなァ　おれァ　こうゆう日のくるのを千秋の想いで待っていたんだぜ　へッへ」
「まあ　早ばやと妙なところを突っぱらせて　随分と気が早いですね　旦那」
「ウッハハ　面目ねえ　面目ねえ　近頃の息子はさっぱり親のいうことをきかなくなって……」
チャリーン　卓の上に小判が

「お吟　こりゃァなんだい？」
「旦那　今夜はそれで　いせいのよい息子さんを他で慰めてやって」
「ウ…ここまできてお吟　そ　そりゃねえだろウ」

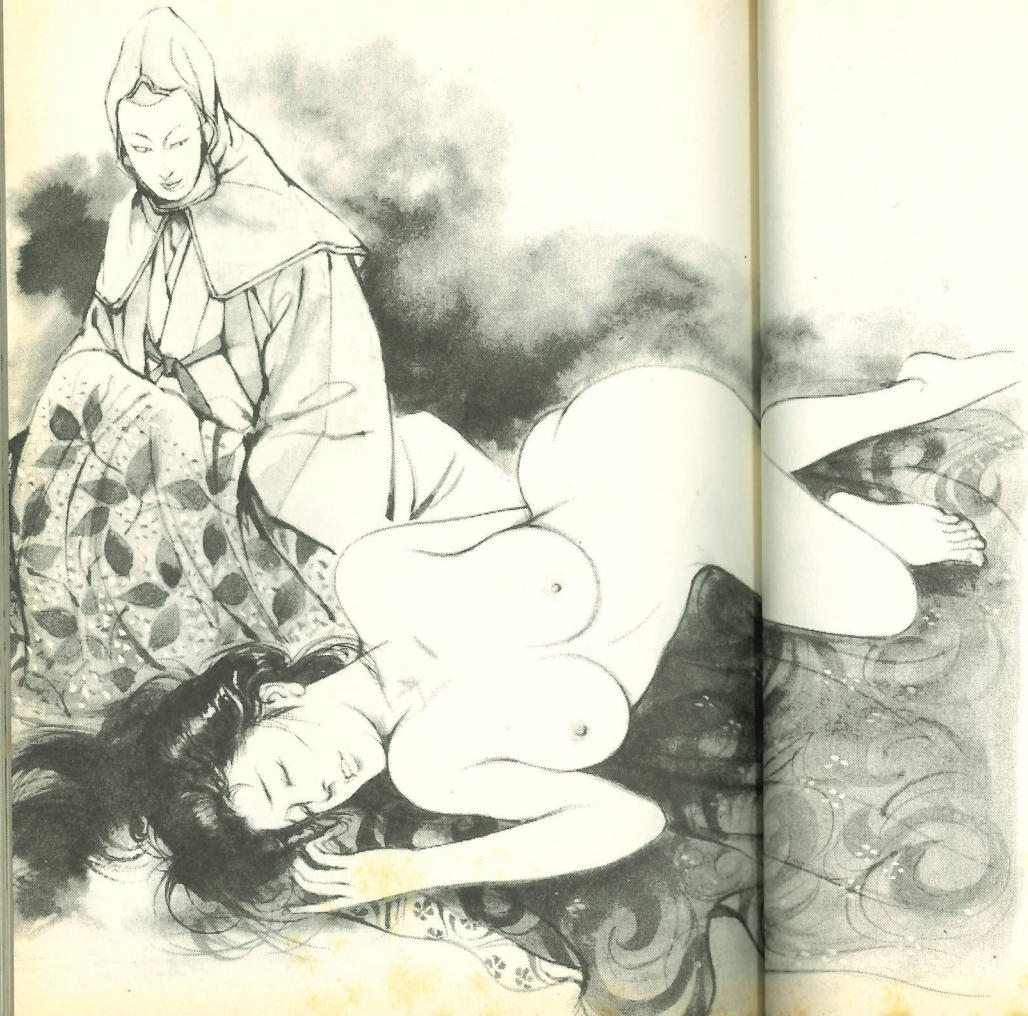
「お吟　来てくれたか　相変わらずきれいだな」
「……」
「美しい女は　梅雨の晴れ間の花をみるようだ　今日はおまえに見てもらいたいものがあってな」
「なんです　それは？」
「七曜の天目茶碗だ」

「これはこの世に幾つとはない名器なのじゃ　汐見屋の番頭が持ってきたのだが」
「汐見屋の番頭が!?」
「ウム　汐見屋の主があゝいう死にかたをしたので店は闕所…財産を没収される前に番頭がこっそりわしのところに持って来て　これで主人の敵をとってくれと」
「敵を！」
「主人は心中と見せかけて殺されたのだというのだ」
「それで新三に同心の角倉を殺させた」

「まあそうゆうところだ　わしは今では茶の宗匠　昔の稼業はコロッと忘れたつもりでいたがこの天目茶碗を手にしたとき昔の血が騒ぎだしてな」
「それで元の稼業に戻った」
「まァな」



「汝見屋とは商売敵だった加賀屋が来てな　この天目茶椀を譲ってくれという……さるお方に献上したいのだそうだ」
「さるお方とは？」
「能面のお方じゃ」「能面！」



「加賀屋には若後家がいてな　これが妙に色っぽい　そこを能面のお方の目にとまって　屋敷に来て茶の相手をしてくれと望まれた」
「汐見屋の娘と同じですね」
「ウム　茶の相手だけならよいのだが無体なことをされて　それを拒めば汐見屋の娘のように死体となって帰されかねない　役人に届出ても何故かウヤムヤに打ち消されてしまう」

「もともと加賀屋は甲州屋と結託して汐見屋の娘を能面のお方に世話をしている　こんどは加賀屋が汐見屋と同じ思いをするのだ　めぐる因果とはこのことだな」

「それで天目茶碗は」

「譲るものか　これはわしの宝よ」

「加賀屋め　この天目茶碗を贈ってなんとか勘弁してもらう腹づもりのようだが　色後家とこの天目茶碗を引換えにされてたまるか」

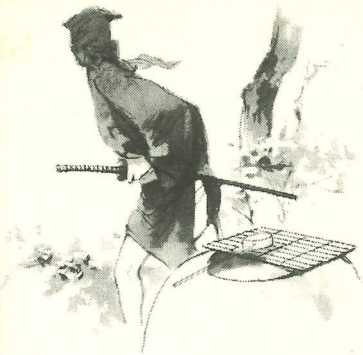
「一体　能面のお方とは　どんな身分のお方なのです」

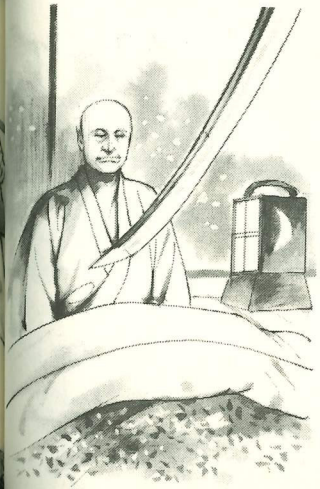
「わしもな　一応は茶の宗匠として身分の高いお方と付合いもあって　その方がたから折りにふれて　噂だけは耳にするのだが　どうやら老中と関わりがあるお方のようだ」

「老中と……」

「ウム…」

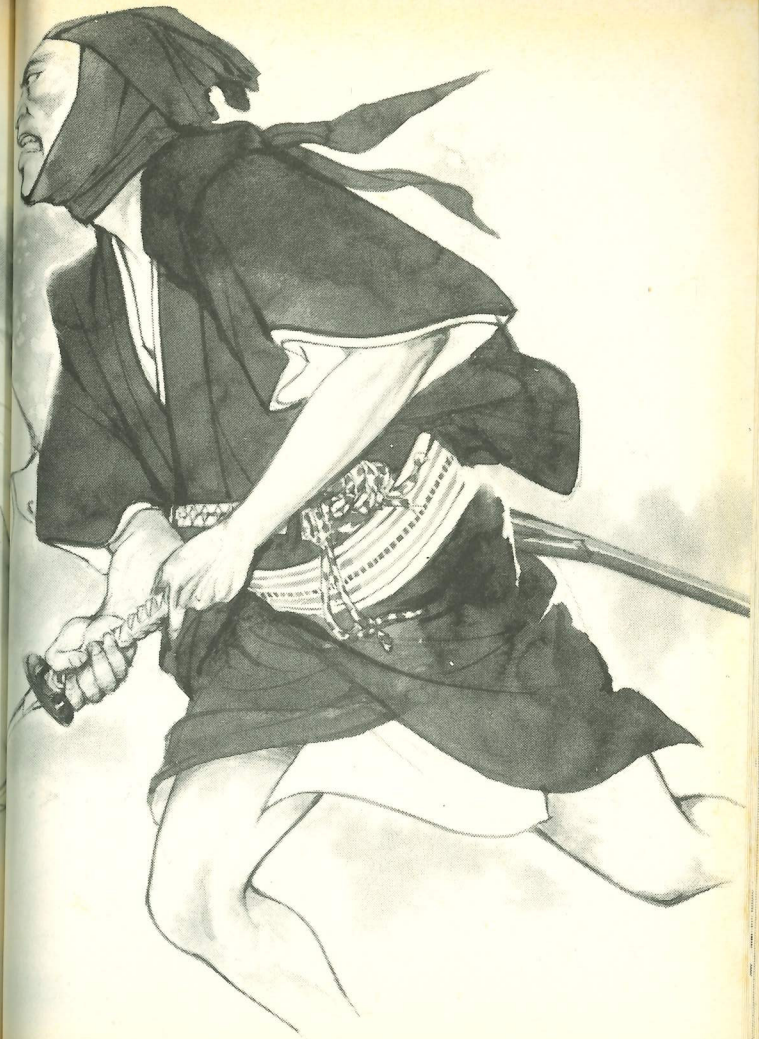
「!?」





その夜　宗匠の枕元（まくらもと）に曲者がひとり
「起きろ」
「加賀屋に頼まれてきたか」
「そう思うのはそっちの勝手だ　天目茶碗を出せ」
「そういわれてもな　あれはこの世に幾つとない天下の名器　わしにとっては大切な宝でな」
「命とどっちが大事だ」

「そういうお前さんの命のほうはどうなるのかね」
「なんだと?」
「後ろを向いてごらん」
「む…」



「フフ　ばかな奴だ」
「元締め　今夜あたしをここに泊めたのは用心棒代わり」
「ま　そういうことになるかな用人棒代はたんと払うよ」
「それで加賀屋は」
「おまえに任せる」

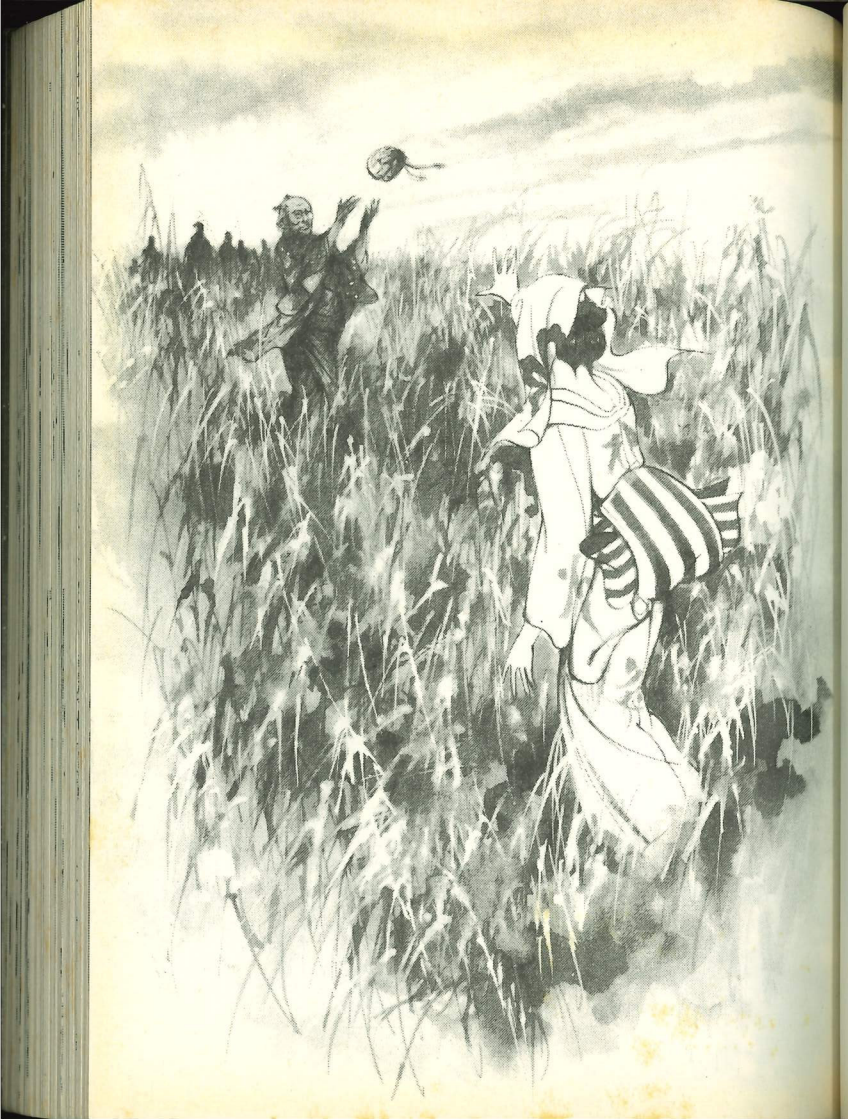
「ああ……旦那様　志乃は能面の屋敷なぞにゆきたくはありません」
「わかっている　そのために大金を出して天目茶碗を手に入れようとしているのだ　天目茶碗を献上すれば　たっておまえを茶の相手にとはいうまいからな　わしもこの年になって折角手にいれたおまえを　あのお方の餌食にされてたまるものか　し　志乃ッ」
「ああ……旦那様ッ」

「お楽しみのところをご免よ」

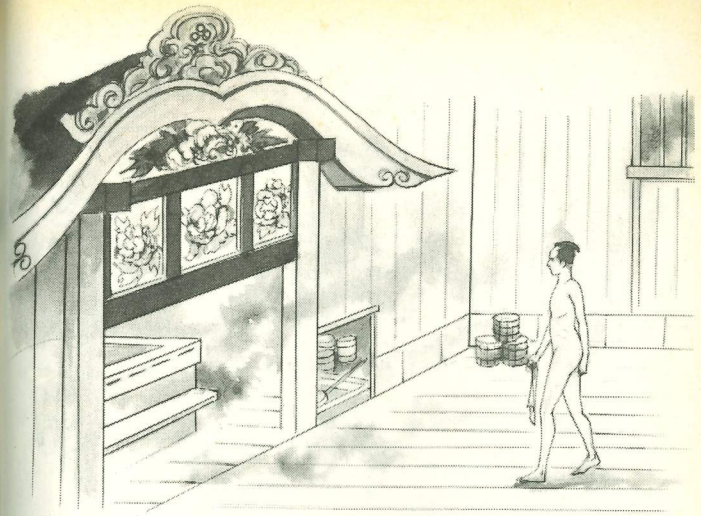
「だ　だれだおまえは!?」
「今戸の宗匠の使いのものですよ」
「なに　今戸の!」
「お前さんがお望みの天目茶碗を持ってきたのさ」
「ナニッ　天目茶碗を　どれ見せろッ」

箱の中には紙片れが一枚
明日子の刻中洲にて千両箱と引換えに天目茶碗を渡す
今戸より
加賀屋　殿

「ナッ　なんだ　これは!?」
「だからさ　明日　子の刻　中洲で待ってるッてことさ」



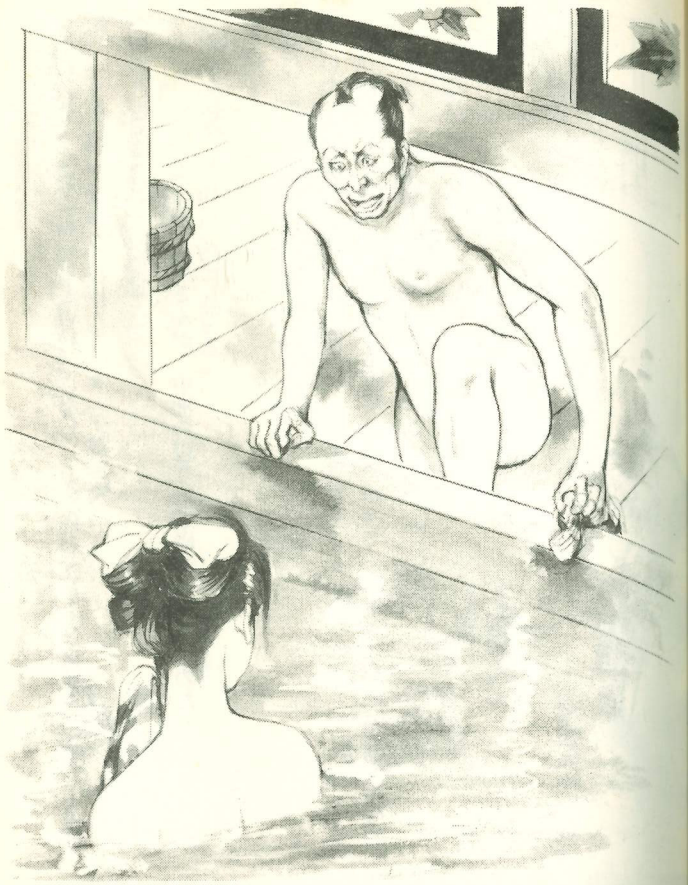
「お吟　来ているか」
「待っていたよ　千両箱は」
「舟の中だ」
「フフフ　若後家のために大枚の千両箱を投げ出すとは　よっぽど惚れてるンだね」
「へらず口はその辺で　約束の天目茶碗は」
「持ってきたよ　それ　受取りな」
「む　高価な品を投げつけるとは　中身は見なくても偽茶椀だな」
「本物はもっと千両箱を積んでもらわないとね」
「どうせ　こんなことだろうと思った　見せしめに今後悪さのできないようにしてやる」
「あたしもね　どうせそんなところだろうと思って　助っ人を連れてきているのさ　新さん　出番だよ」
「おッと　姐さん　お声を待ってましたぜ」
新三が　葦の中から躍り出した



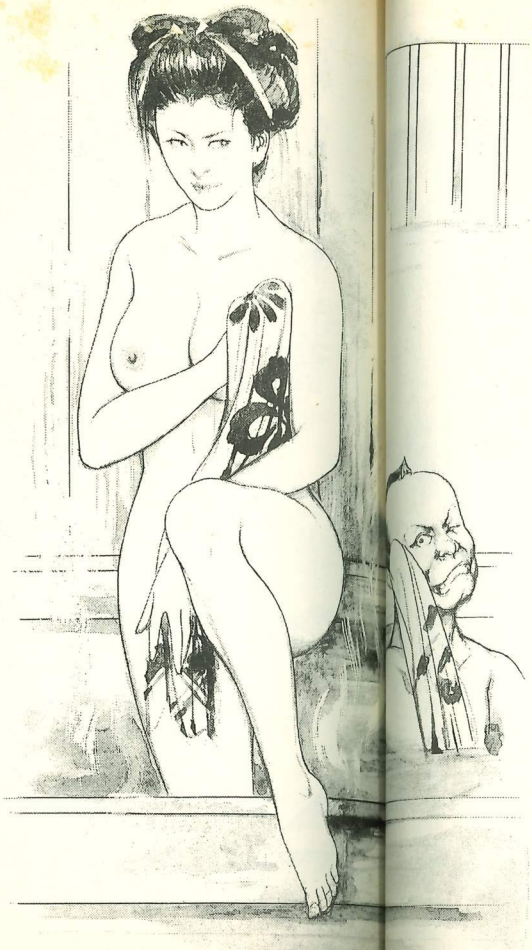
「おッ　おめえはお吟」
「あら　神崎の旦那」

八丁堀七不思議の一つ　女湯に刀掛
早朝空いている女湯を利用できるのは
同心の特権の一つ

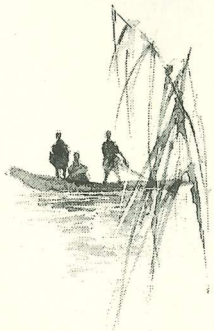
「まさかおめえが入っているとも知らねえで　クッ　こりゃあ　モロに見せちまったなァ」
「八丁堀の旦那が入らないうちにと思ったんだけど」
「なにかあったのかい　おめえのことだどうせひと仕事終えての朝風呂なんだろうが　ところで　この間は恥をかかせてくれたな」
「あら旦那　まだ怒っているンですか」
「おれがその気になったら今日にでもおめえを引っくくることもできるんだぜ」

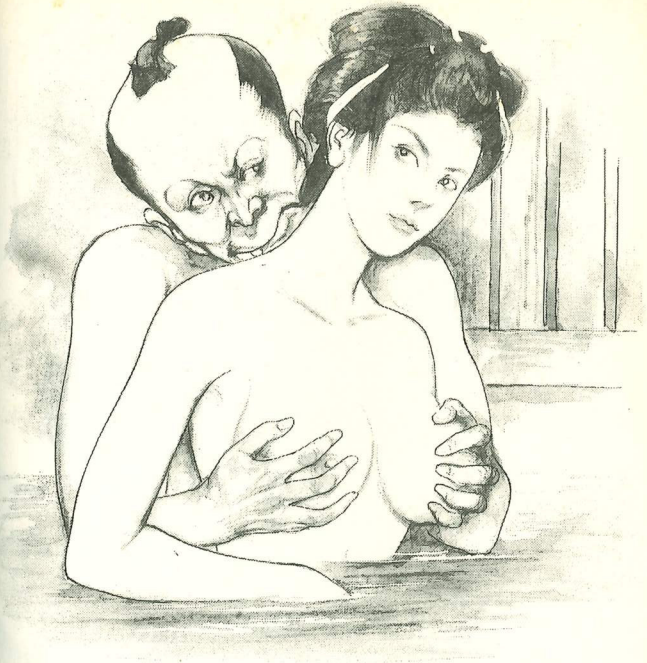


「あら旦那　今更こわいこといいッこなし　その代わり耳よりな話を聞かせてあげる」
「なんのことだい」
「蔵が一杯になった加賀屋さんが　中洲の辺りに千両箱を一つ沈めたッてこと」
「嘘つきやがれ」
ザザーッ
「嘘だと思うなら　浚ってみたら」
艶めいたお吟の濡れた裸身が柘榴口から消えてゆく
「チッ　いい女が目の前で大股ひろげてみせやがって　畜生ッ…だけど中洲に沈められたという千両箱　一度確かめてみッか……」



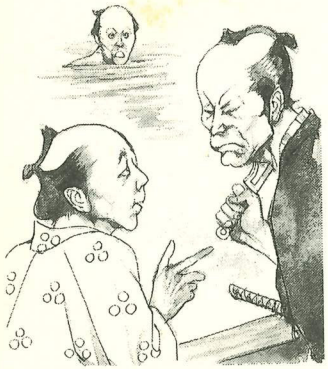
「よしっ　船頭　この辺りだ　頼むぜ」
「へい　もぐりなら任せて下さい」
ドボーン　でんでこの松が心配して
「旦那　本当に沈めてあるんですかねえ　千両箱が」
「お吟がそう言っていた　お吟がな……」





フフフ　しかしあのとき　お吟と一緒に風呂に入れるとは思わなかったなァ……あの餅肌を目の前に拝んだときァ　さすがのおれもゾクッときたぜ　あのときおれはお吟をギュッと抱きすくめることもできたンだ　だがおれの知性が許さなかった…

「旦那　ありました　ありました」
「あったか！」
「でも中身は石ころですよ」
「そんなはずはねえ　お吟が確かに千両箱を」
「でも中に小判がつまっているとは言わなかったんでしょう」とでんでこの松
「うッうーン」



ドボ～ン「ああーッ」
「旦那ッ　いきなり突き飛ばすなんてひどい」
「てめえの言うことがいちいちかん癪にさわるんだよッ」

「お吟　加賀屋をからかい過ぎたようだな　昨夜　また賊を差しむけてきたぞ」
「それで…」
「なァに　わしは隠れ部屋で鍵をかけて寝ていたのだが天目茶碗をさがしてか　そこら中を荒しまわっていきおった」

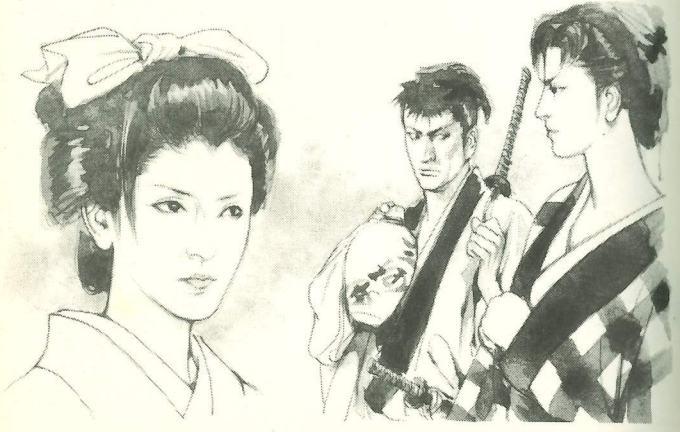
「いずれ加賀屋は……」
「ウム　その中にな……しかし　商売敵の汐見屋を闕所に追い込んだ筋書きに今度は加賀屋がはまりこんでゆくだろう……
加賀屋はいま若後家を後添いにむかえて魂まで抜かれてしまったようだ」

「志乃　おまえも辛いだろうがわしも辛い…だがあきらめて能面屋敷にいってもらわねばならぬ……」

「ああーっ　旦那様ッ」

「お柳　また酒か……」
近づいた檜九十郎ののの指がスッとお柳の太ももの奥へ
「濡らしてるな　珍しく…」
「おめえにもその気があるのかい…」
「フン　毎夜　あのお方の女の責めかたにはヘドが出るが　それをよがっているあの女もたいした玉だよ」

「志乃か　加賀屋の後添いに納まっているようだが　いずれ加賀屋も食いつくされることだろうよ　この世は魑魅魍魎（ちみもうりょう）……そういう俺も仕官を目当てにこんな化物屋敷にへばりついているのだが……お柳　おめえの生きる望みはなんでえ」
「あたいを片目にした奴を斬ること」
「だれだい　そりゃア」
「霞斬りのお吟」
「お吟だと」
「いつかあいつと決着をつけてやるのさ」
「！……」



「ご用人さま　志乃がこのお屋敷に招かれてから今日で三日目　どうか志乃をお帰し願えませぬか」
「こっちは帰ってもらってもよいのだが　志乃どのが帰りたくないと言っておる」
「まさか？」
「志乃どのは当屋敷が気にいられたようじゃ　加賀屋　おまえ若い後家の扱いが悪いのではないのか」
「そ　そんな」
「ところで天目茶碗の話　あれはどうなっているのだ」
「それがまだ…」
「わしも是非その天下の名器とやらを手にとって見たいものじゃ」

天目茶碗は元々汐見屋が抜け荷で唐から仕入れたもの　くそっ　こうなったら意地でも今戸の徳右ヱ門から天目茶碗を奪ってみせるぞ

「加賀屋と言ったな　今戸の徳右エ門は今では茶の宗匠とやらに納まっているようだが　元をただせば闇稼業の元締め　その徳右エ門から天目茶碗を奪ってくれと……わしを闇稼業の者と　だれから聞いた」
「手前も抜け荷という危ない商いをしておりますので　食いつめ浪人の四、五人はいつも手元におります　蛇の道は蛇とやら　その筋からの伝てで…」
「徳右エ門には以前に煮え湯を呑まされたことがある　この仕事　引き受けよう」
仏師赤不動玄択の厚い唇から紫煙が吐き出された

「今戸の宗匠といわれるお方の茶室はこちらでございますか　手前も少々茶をたしなむ者でございますが　なんですか　こちらに天下の名器　七曜の天目茶碗がおありとか　手前もぜひこの手にとって拝見させていただきたいと思いお伺いいたしました次第」

「それは　それは　どうぞお入り下さい」

「恐れ入ります」

「どちらから聞いて参りました　ここに天目茶碗のあることを」

「は…そ　それは　さるお方から…」

「さるお方とは」

「お名前を申し上げなければいけませぬか」

「いや　無理にとは申しません」

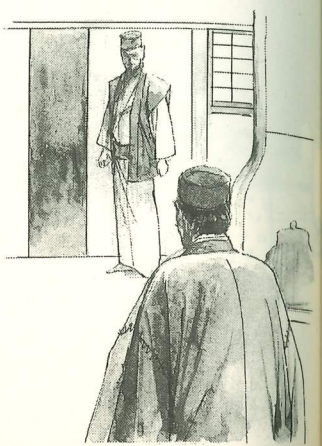
「さ　どうぞこちらへ」

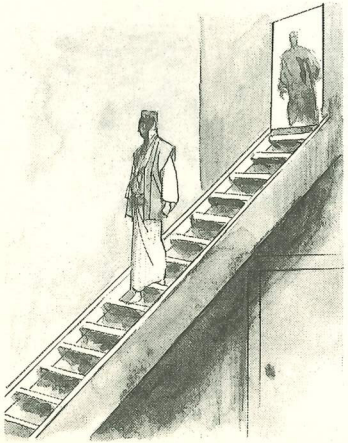
「地下に部屋がございますので」

「近頃　噂をきいて茶碗を狙う盗賊が忍び込みますので」

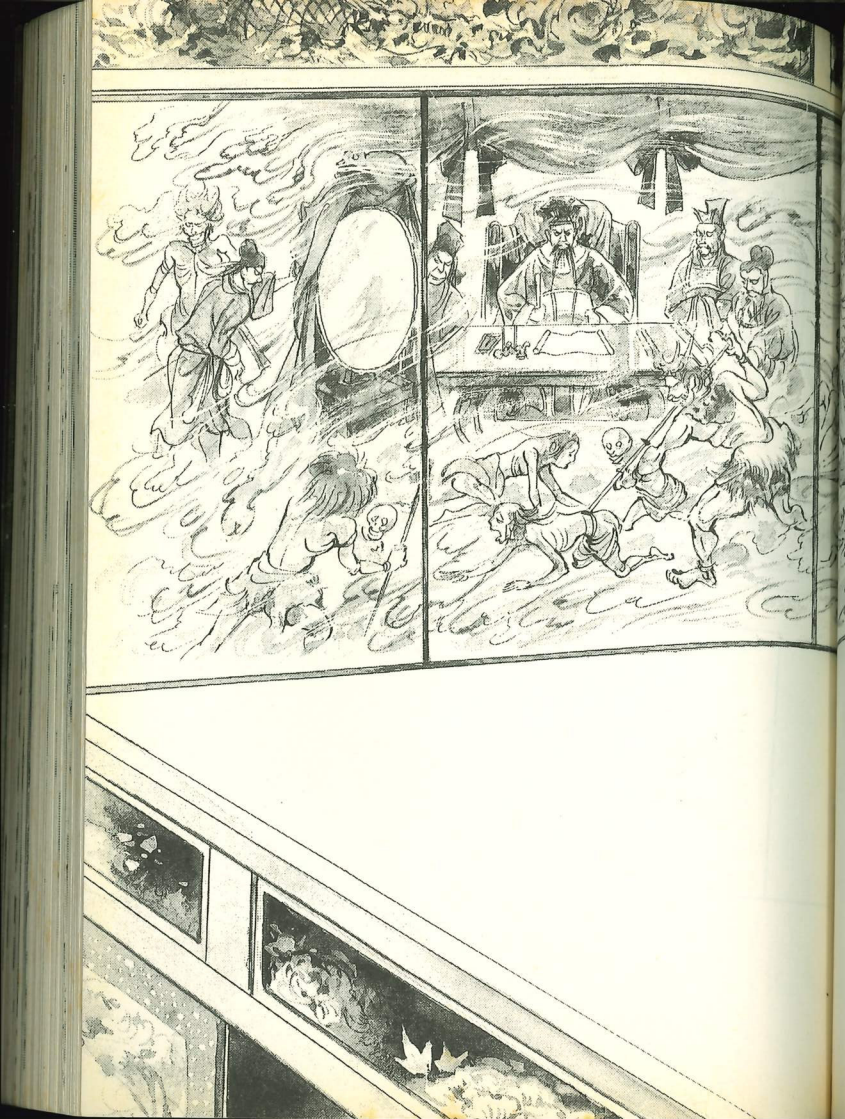
「それは　それは　用心のよろしいことで」

男は先に立つ徳右ヱ門の後について地下の一室に案内されて「アッ」と声を呑んだ



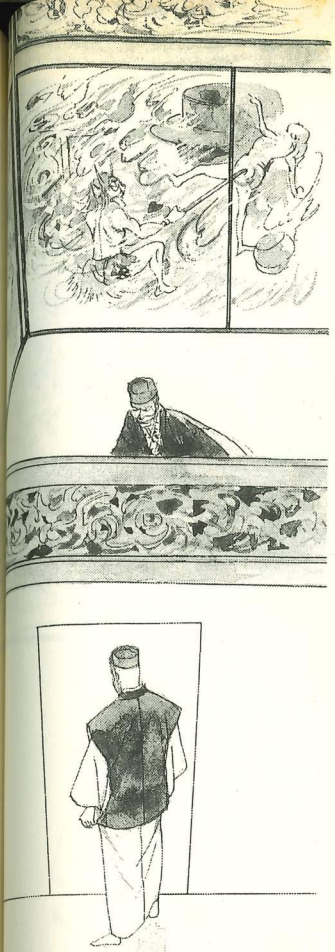


「ホウ　これはまた変わったお部屋でございますな」
「極楽の間です　年をとりますとこういう楽しみもほしくなりましてな　あなたもお嫌いではないでしょう」
「これはどうも　恐れ入ります」



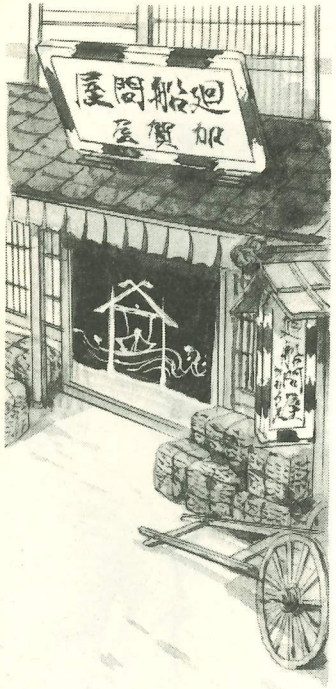
「こちらが地獄の間です」
「ホホウーッ」
「われわれはいつかは閻魔(えんま)の前で裁きを受ける身　気にいりましたらどうぞごゆっくり…」
ギイ　ーッ

「あッ　何をするッ」
「知れたこと　おまえは　八幡の赤不動の手の者と　とうに感づいている　そこで地獄絵を見ながら餓死するがいい　喉がかわいたら　毒入りの水差しも置いてある」
「くッ　くそッ!!」
「はっははは……」



「お吟　八幡の赤不動がかかわってきた」
「えッ　八幡の赤不動が」
「ウム　どこぞの茶人になりすまして天目茶碗を狙ってきた男　あれは確かに赤不動の手の者だ」
「加賀屋め　自分の飼っている用人棒では埒があかぬとみて赤不動に頼み込んだとみえますね」
「ウム　地下の地獄の間にとじこめておいたから　やがて餓死するじゃろうが　赤不動とは嫌な奴がかかわってきた　お吟　おまえも身辺を気をつけたほうがよい」
「……」

八幡裏の仏師　赤不動の玄択
元闇稼業の元締めであった今戸の徳右ヱ門の強力なライバルでもあった。
「わしはあいつとことを構えたくないと思って元締めを降りたのだが……」



「奴が天目茶碗を狙いだしたとなるとおちおち茶も飲んではおられなくなった」
「で　どうします」
「元から消してゆくか」
「まず加賀屋から」
「フム……」

「あたしが加賀屋久兵衛だが」

「あなたですか　志乃の姿を絵にしたいといってこられたのは」

「はい　これが見本です」

「ほう　これをあなたが」

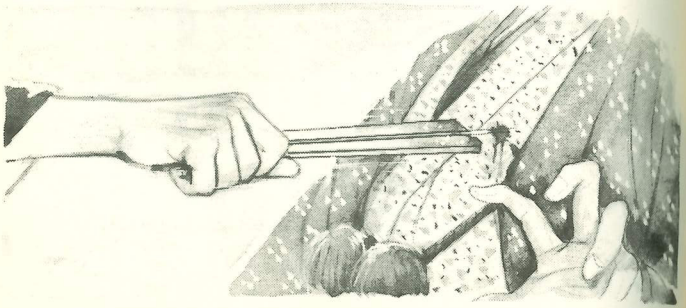
「いいえ　私はただの扇子売り　絵を描くのはお吟というあっしの姐さんで」

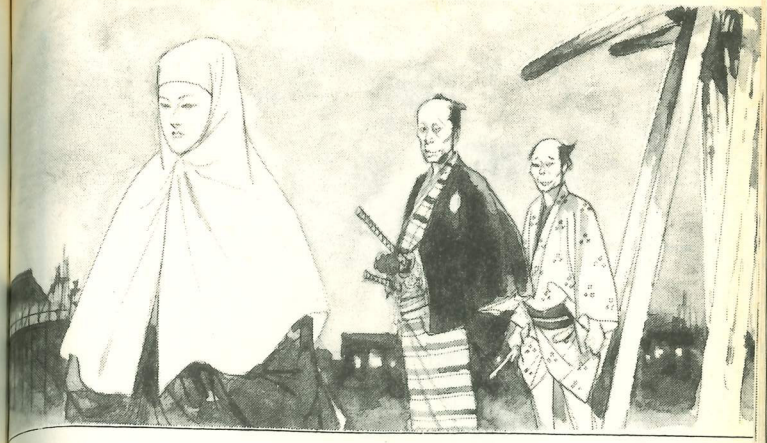
「なにッ　お吟!?　どうもどこかで見た覚えがあると思ったらおまえは中洲でお吟の助ッ人で現れたあのときの……」

プシュッ

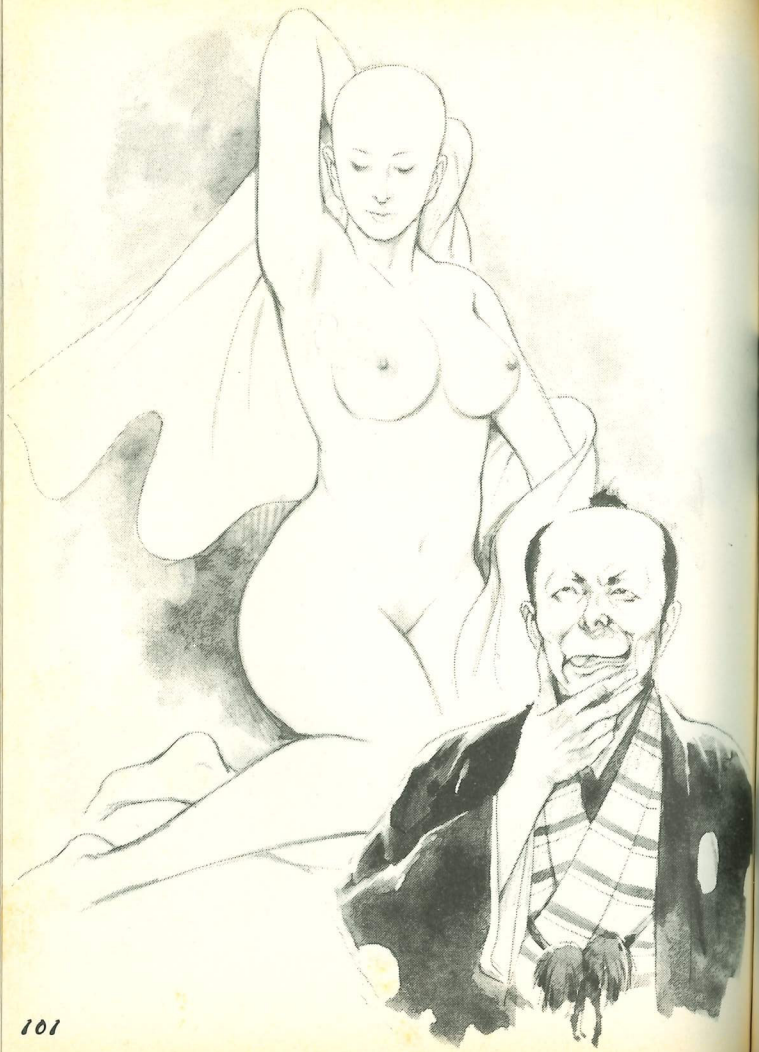
「ウッ…」

「加賀屋さん　思い出すのがちょいと遅かったようだね」





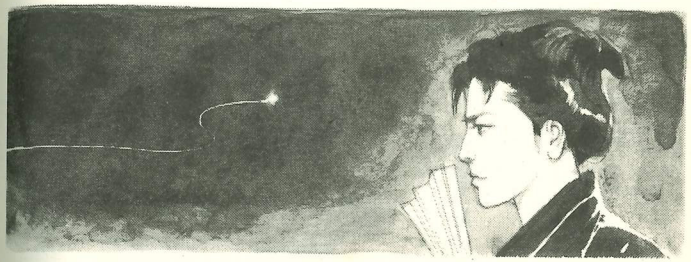
宵闇の中に溶けこむように尼がひとり
「もの思えば沢の螢もわが身よりあこがれ出ずる魂かとぞ見る…」
「旦那　妙な経を読む尼さんですね」
「あれはお経なんかじゃねえ　和泉式部の詠んだ歌だ　螢にひッかけた恋の歌とでもいうのかな」
「へエ　さすが旦那は学がおありなさる」
「まあ　そこがおめえとおれの差だな　しかし妙に艶ッぽい尼さんだッたな　ああゆうのを一度裸に剝いてみてえ」
「又すぐ落とす　旦那のそばにいると近頃あっしまで品がなくなって…」
「なにをいやがる　てめえが品をとやかく口にする柄かよ」



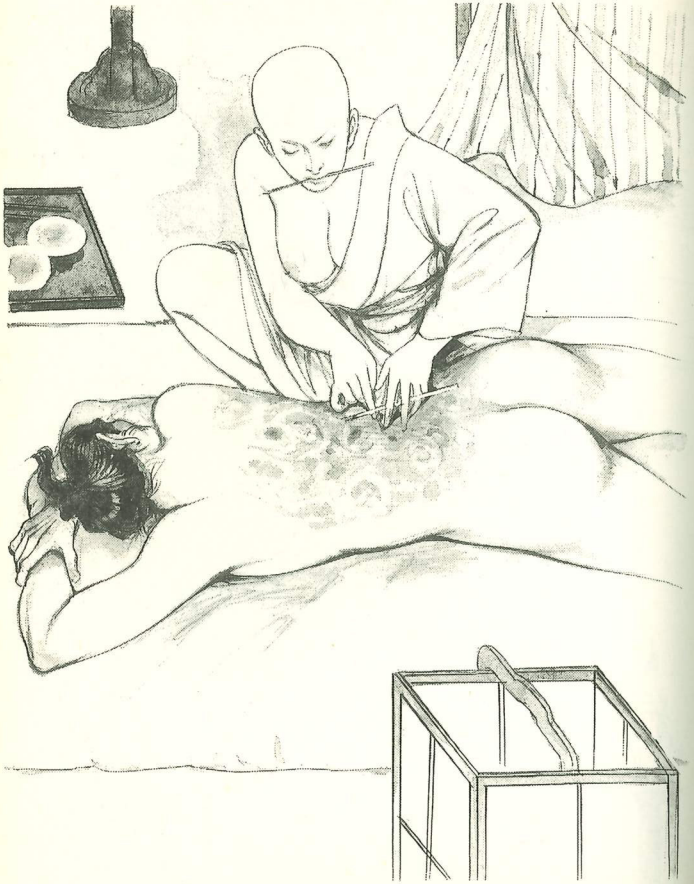
〽川風に～
裾なぶらせて
辰巳まで～

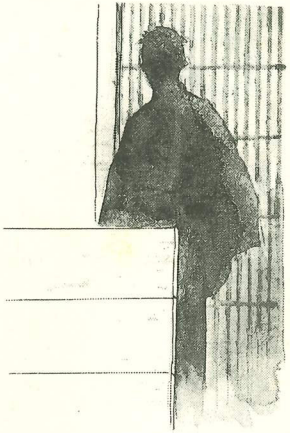
「おや
螢が……」

ヒユッ
ヒユッ
「む
吹き針ッ」

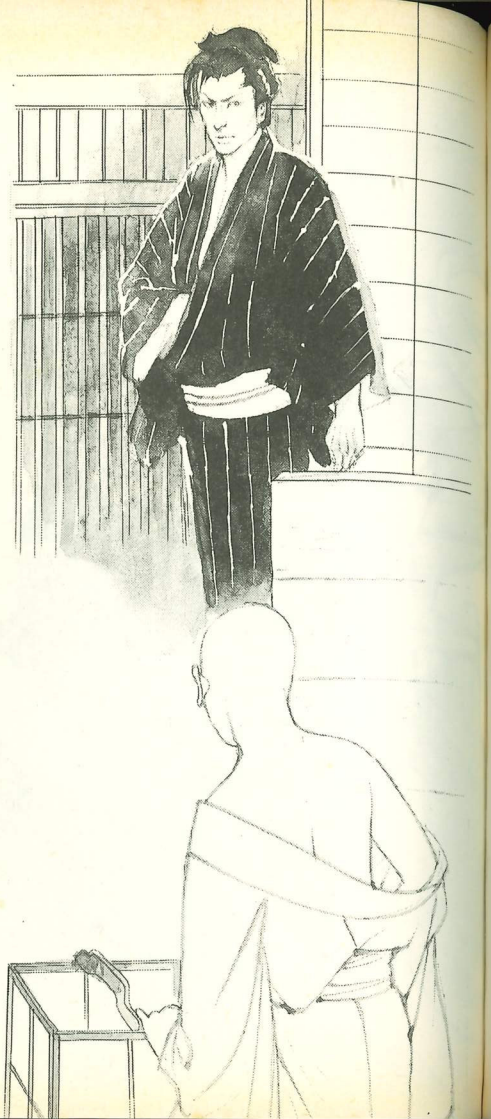


「新さん　そいつは螢尼(ほたるあま)のおけいだよ　あいつは暗闇に螢を使って毒針を吹きつけてくる　針は刺青(いれずみ)にも使う　あいつは彫り師のおけいでもあるのさ　どうやら赤不動は手の者を使って　私たちを消しにかかってきたようだね」
「消(け)される前に消してやる　赤不動でも螢尼でも　おれたち闇の稼業は食うか食われるかだ　姐さん　おけいの住まいは」
「行くつもりかい」

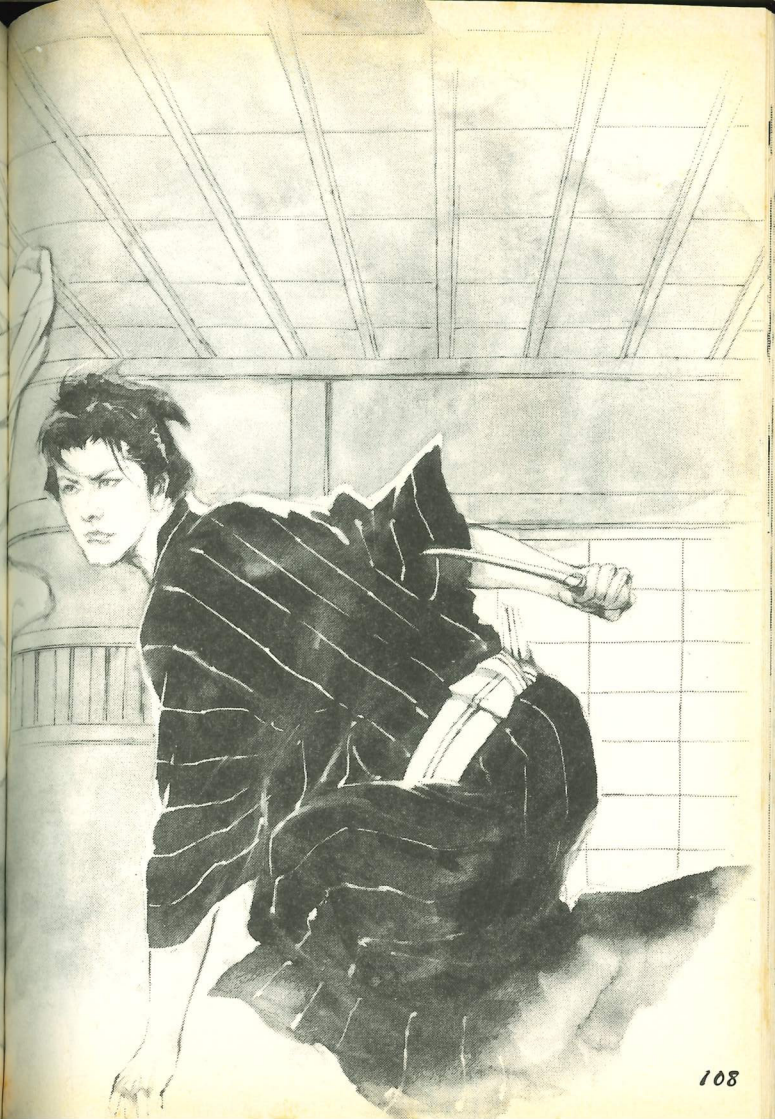




「誰だい？」
「刺青をお願いに」
「そこで待ってな　やりかけのこいつをすませちまうから……」
プツ　プツ　プツン
「あいよ　今夜はこれまで　二三日したらまた来な　仕上げちまうから」

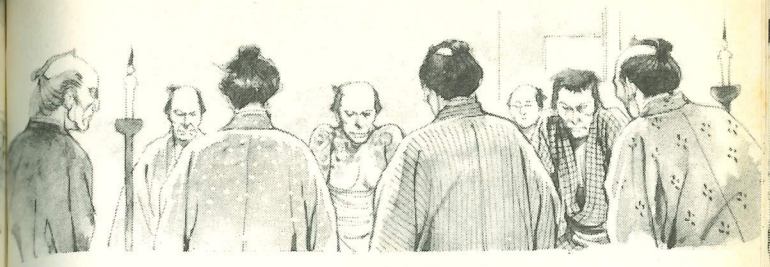


「そこの若いの　誰からの伝てで来たンだい　伝てがないと彫らないことにしてるんでね」
「伝ては八幡の赤不動とでもしておこうか」
「赤不動だと、ててめえは！」
「扇売りの新三　おけい先夜のお返しに来たぜ」



闇の中でおけいの裸身が妖しく揺れる
「フフ…おけい　灯りを消してまた螢を使うつもりか　この新三には二番煎じは効かねえぜ」
フツとおけいの気配が消えた

「しまった　おけいめどこへ！」
はっと気づいたときは既におけいの姿は部屋の中から消えていた
「くそッ」



「さあ張った
張った　丁方
ないか　半方
ないか」

ギーィ
夜半
賭場を開いて
いる旗本屋敷
の裏木戸から
町人風の男が
出て来た

「おいッ　待ちな」
「ヘイ」
「今頃帰るようじゃ　今夜目が出なかったようだな」
「ヘエ　何のことで」
「トボけるつもりかい　この屋敷で毎晩サイコロが振られているのは分ってるンだ　まあ　尻の毛まで抜かれないうちに帰って寝ちまったほうが利口ってもんだな」
「ヘイ　お役目ご苦労さまで」
「フン　なあ　松の字　一度踏みこんでやりてえが　旗本屋敷は目付の領分　町奉行所じゃ手が出せねエッてのは何とも癪に障わるじゃねえか」

「旦那　また誰か出てきましたぜ　ありぁいつかの尼さんですぜ　尼さんも博奕(ばくち)場通いをするンですかね」

「フン　どうもうさん臭いから後をつけてみるか」

「おや　旦那方　お寺社のお役人で」

「いや　南町の者だが　近頃の江戸は尼さんの夜歩きには物騒と思ってね」

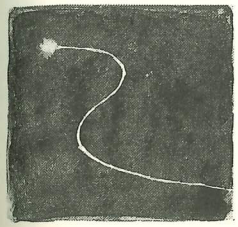
「送って下さるンですか　それはどうも」

―けっ　坊主は寺社奉行の掛り　町奉行所では手が出せねエことを知ッてやがる―

「旦那　螢が飛んでますぜ」

「ほう……」

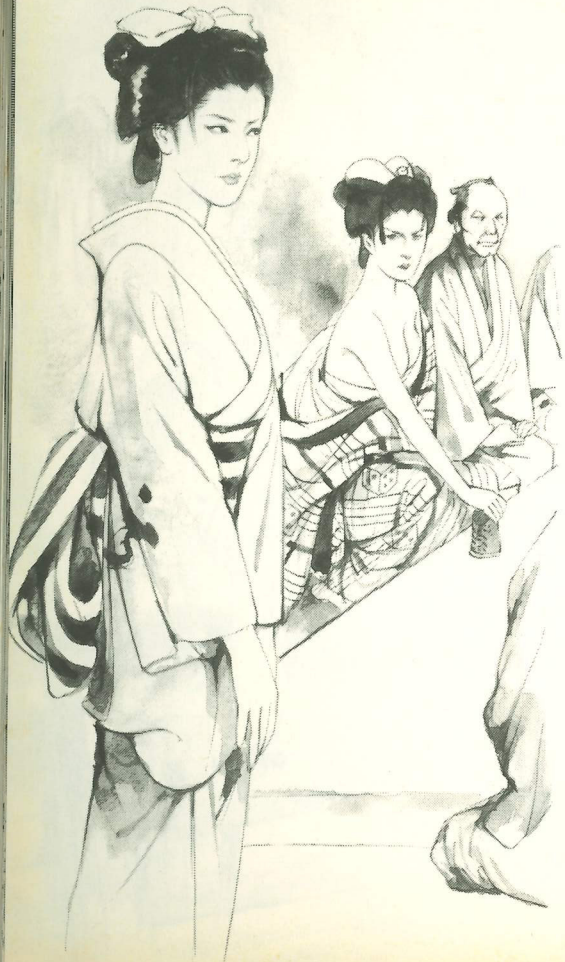
「あッ　尼さんの姿が……」



「松の字…こいつはうまくまかれちまッたようだな」

「螢を飛ばして姿を消すなんて　あの尼ただ者じゃありませんぜ」

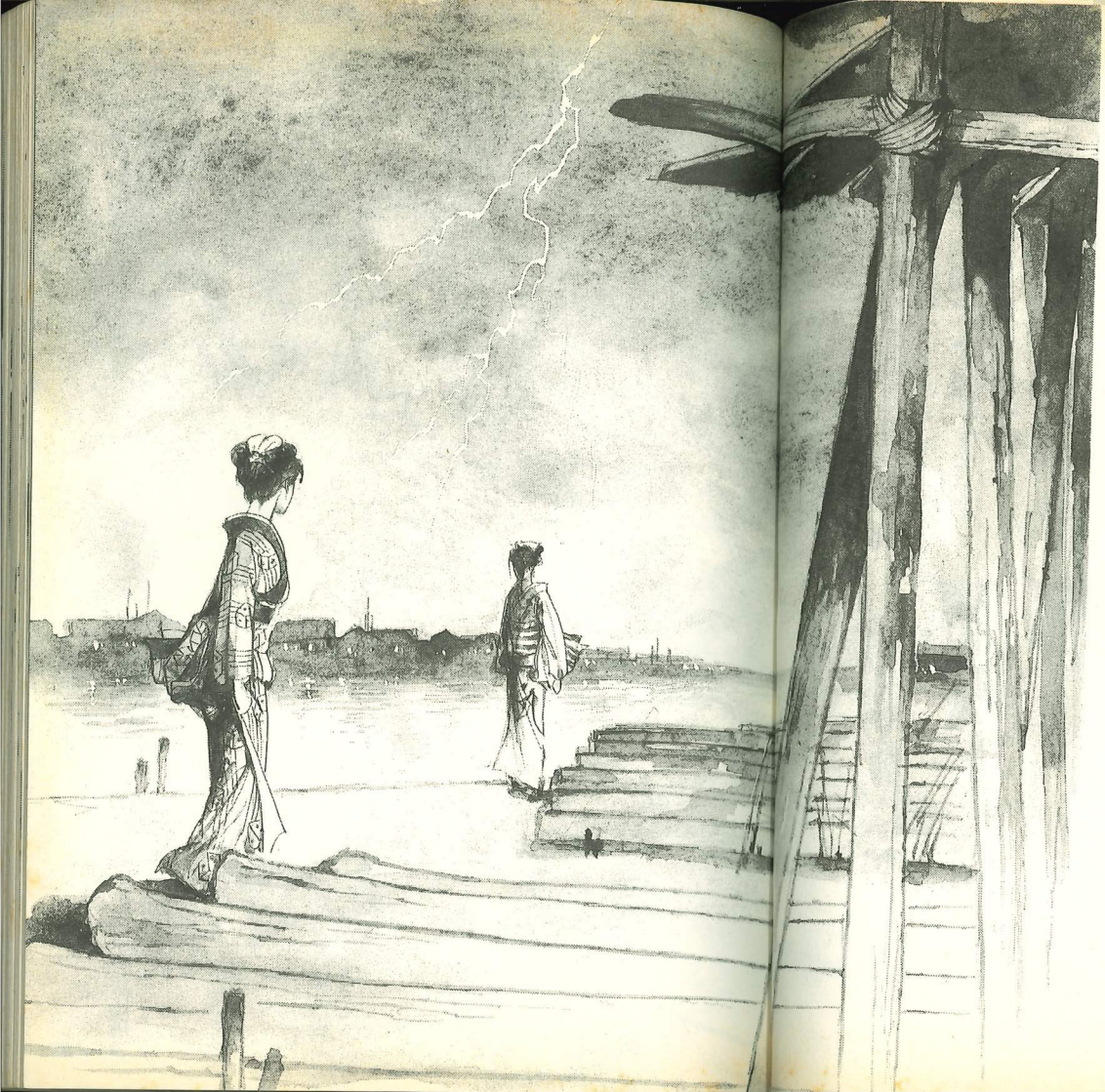
「さあ　張っておくれ　張っておくれっ　どうも張り方がパッとしないね　あたしの壺振りじゃ気がのらないのかい　それとも股の開きが足りねえとでもいうのかいッ」
「おっと　姐さん　そこであまり色気をふりまかれたンじゃ　そっちに気をとられて賽の目を読む感が鈍っていけねえや　お手やわらかに頼むぜ」



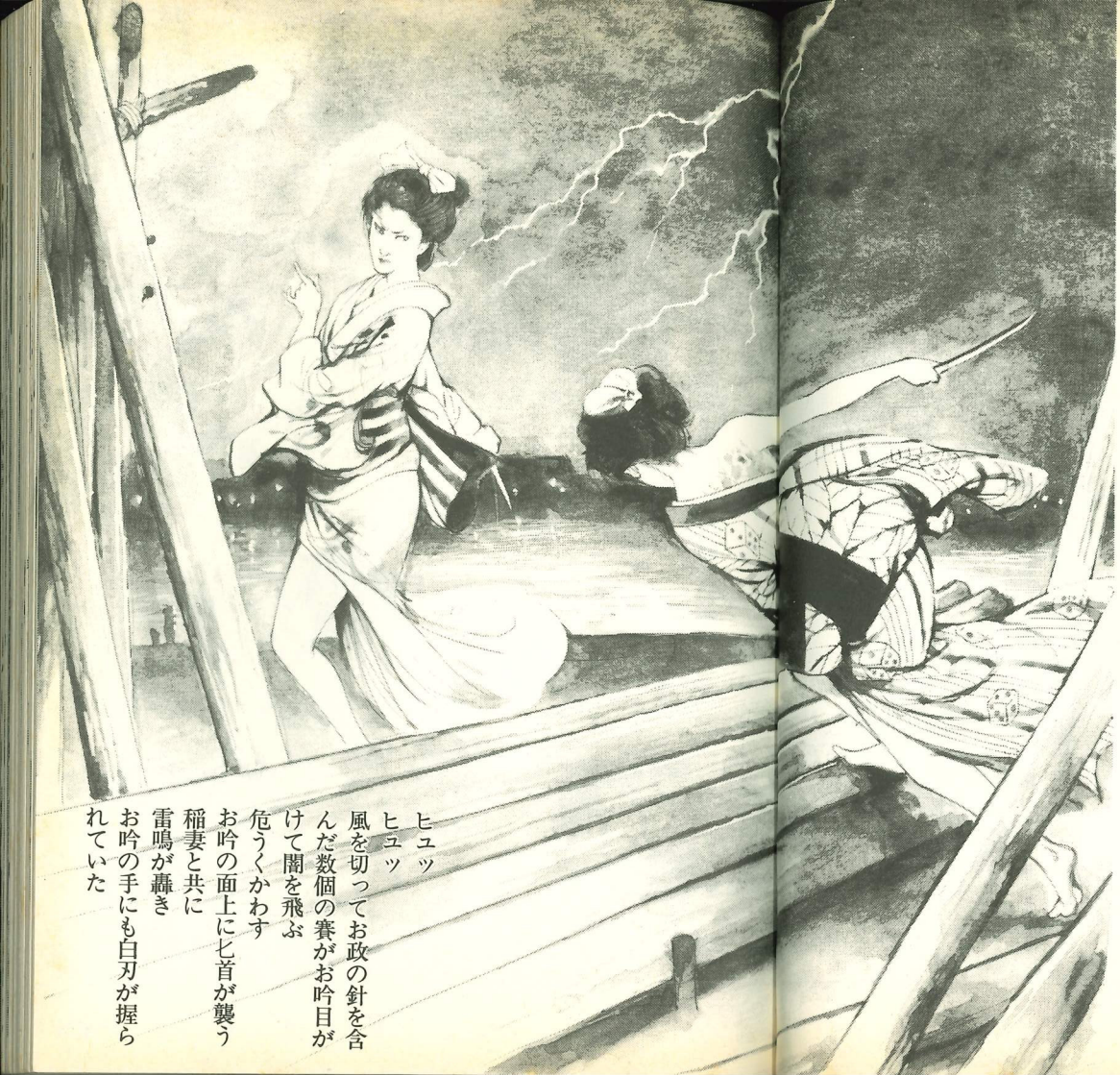
「フン　そこでボンヤリ立っている姐さん　張るのかエ　張らねえのかエ」
「……」お吟である　壺振りの目が笑って
「お目当の蠅尼ならとっくにこの賭場から消えちまったよ」
「……!?」

遠い空を稲妻が走る
賭場を出たお吟の前に影が動いて
「お吟姐さん…あたし雷(かみなり)のお政」
「……」
「さっきは賭場で螢尼を探していたね
図星だろ」

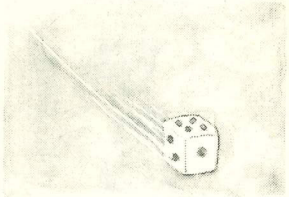
「お吟姐さんとは以前は闇(やみ)の仕事仲間だった　だが姐さんは徳右ヱ門にあたしは赤不動について今では仕事の上で張合う相手　あたしにその気はないのだけれど　元締めの指し図にそむけばこっちが仲間に殺される」

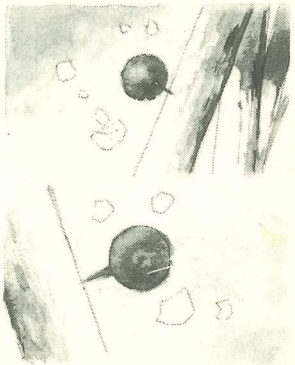


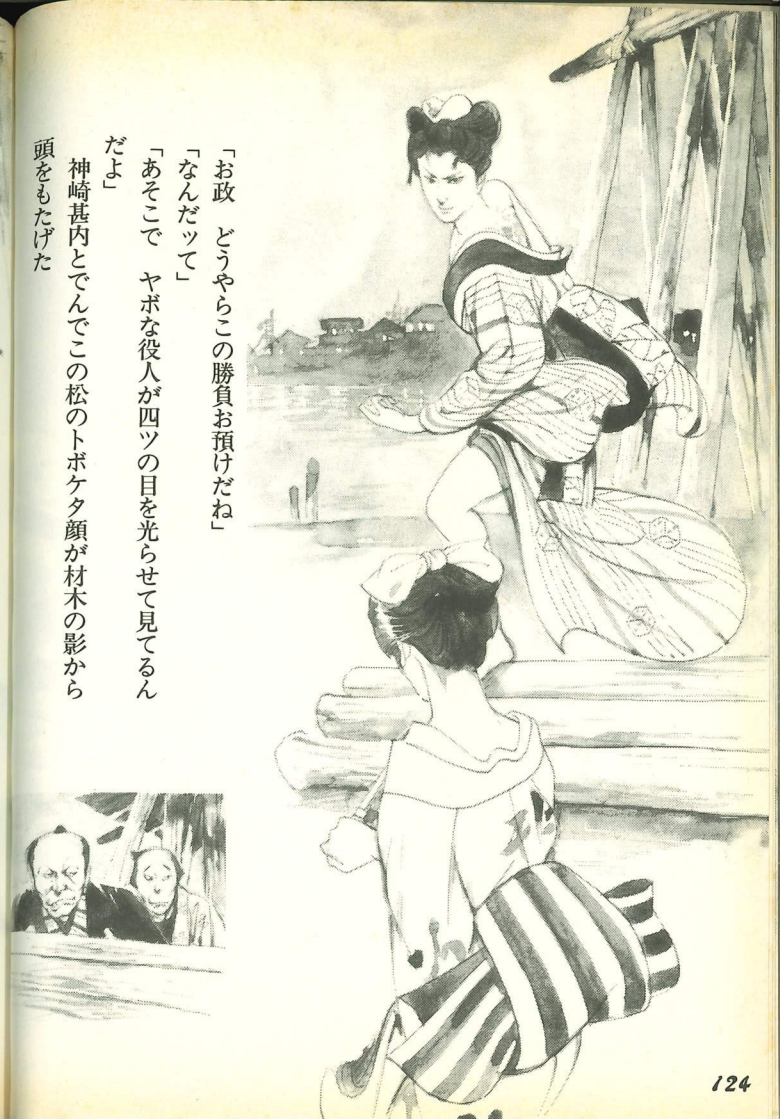
「気の毒だけど……」
「…」
「死んでもらうよッ」
「そうかい　お互いに好きで選んだ道ではないけど　これも生まれついての運命(さだめ)と諦めて相手になるより仕方がなさそうだね」
稲妻が一きわ鋭く空天を裂いて闇の中に対立するふたりの姿を浮び上がらせた



ヒュッ
ヒュッ
風を切ってお政の針を含んだ数個の賽がお吟目がけて闇を飛ぶ
危うくかわす
お吟の面上に匕首が襲う
稲妻と共に
雷鳴が轟き
お吟の手にも白刃が握られていた







「お政　どうやらこの勝負お預けだね」
「なんだッて」
「あそこで　ヤボな役人が四ツの目を光らせて見てるんだよ」
神崎甚内とでんでこの松のトボケタ顔が材木の影から頭をもたげた

「おい　待ちな」
「おや　旦那　お役目ごくろうさまですね　おっしゃるように待ってもいいんですけど　どうやらひと雨きそうなンでね」
「ウウン」
ザーッ　ゴロゴロピカピカッ

「お吟」
向うの橋桁に人影が
動いて
「見ていたぜ」という声
「ア　あンたは……」
檜(ひのき)九十郎だった

この世でたったひと
りお吟が身体を許した
男……

「お吟　絵筆を持たせれば静かに暮らせる技を持ちながら　まだ闇の稼業から足が抜けないらしいな」

「そうゆうこのおれも　さる屋敷の用心棒がわりの飼い犬になり下がっていて　おめえのことはいえねえ立場だが……」

「気をつけろ　お柳がおまえに復讐することに執念をもやしているぜ」

「お柳が！」　無理もない

女が命とする顔に傷をつけられたのだから……

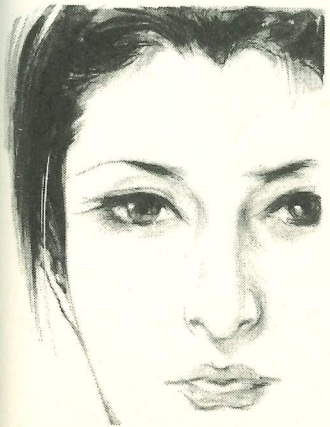
お柳の片目をつぶしたのはこのあたし

それもこの男檜九十郎を奪い合ッての斬合いだった

あの頃のあたしは人並みに恋もして若かった

だが
命懸けで惚れた男を
目の前にして何故か
今心が動かない　そんな自分のすさみようがたまらなくいとおしく悲しい

「雨が上ったようだな」
「……」
「お吟　今度逢うときは修羅場かな　そんな気がする…自分を大事にしろよ」
男の…最後のことばに不覚にも涙を誘われて……

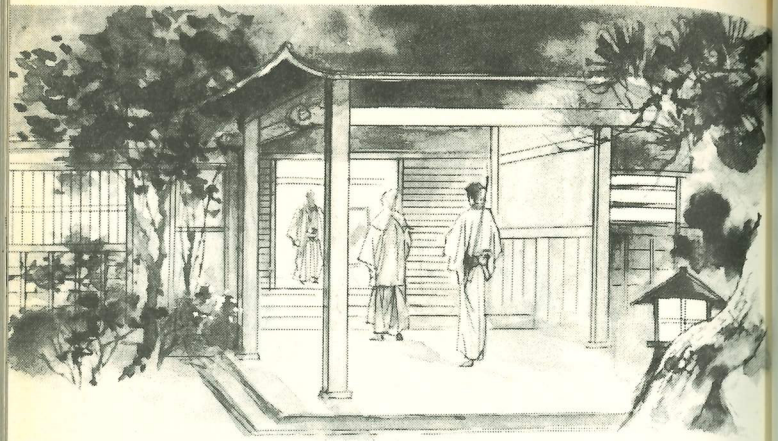


それを雲間に顔を出した月に見られたようで恥かしい―

「旦那好みの女ですね　そこでいつものひと言」
「なンでェ」
「ああゆう女を一度裸に剝いてみてえ」
「おれはてめえほど品が悪くできていねえよ」
「チェッ　旦那もコロコロ変わってくれますね」

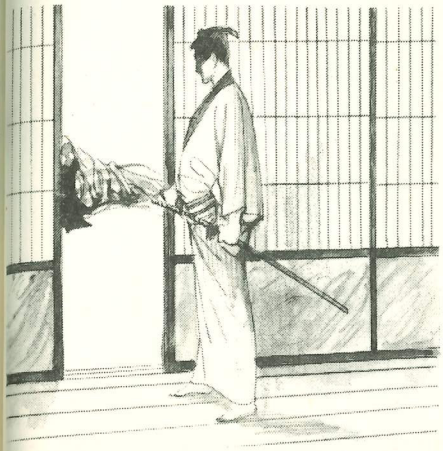
「旦那　女同士の斬り合いというのもすさまじいものでしたね」
「うん」
「片方はお吟でしたが　相手の女は？」
「壺振りのお政といってな　背中一面に雷の刺青が彫ってある　二つ名が雷のお政　いずれしょっ引かなきゃならねえ女だが　チョイト艶ッぽい」

「おい　松の字　あそこにゆくのは能面だぜ」
「確かに」
「つけてみよう」「待ちな」「む…!?」
「町方の関わるお方じゃねえ下手な詮索をすると笠の台が飛ぶぞ」



「なンだいあの浪人者は?」
「どうせ能面に飼われた野良犬さ
くそッたれめ　おれに向かって凄
みをきかせやがって　何れ身元を
洗ってしょっ引いてやらにゃ」

「檜　今宵は……」
「何事も……」
「ご苦労だった　休んでくれ」
用人　三村庄左衛門の安堵の声
「お柳　また酒か　お吟に会ったぞ」
「おまえはお吟に仕返しをするつもりらしいが　お吟とやり合って勝てるつもりか」



「勝つさ　あのときは酒を呑んでいて不覚をとったけど　こんどはあたいがあいつの片目をつぶしてやる番さ」

「そなたが尼の彫り師おけいか」
「はい」
「刺青とはどんなものか　この目で見てみたい　爺　志乃をここへ呼べ」
「は　はい」

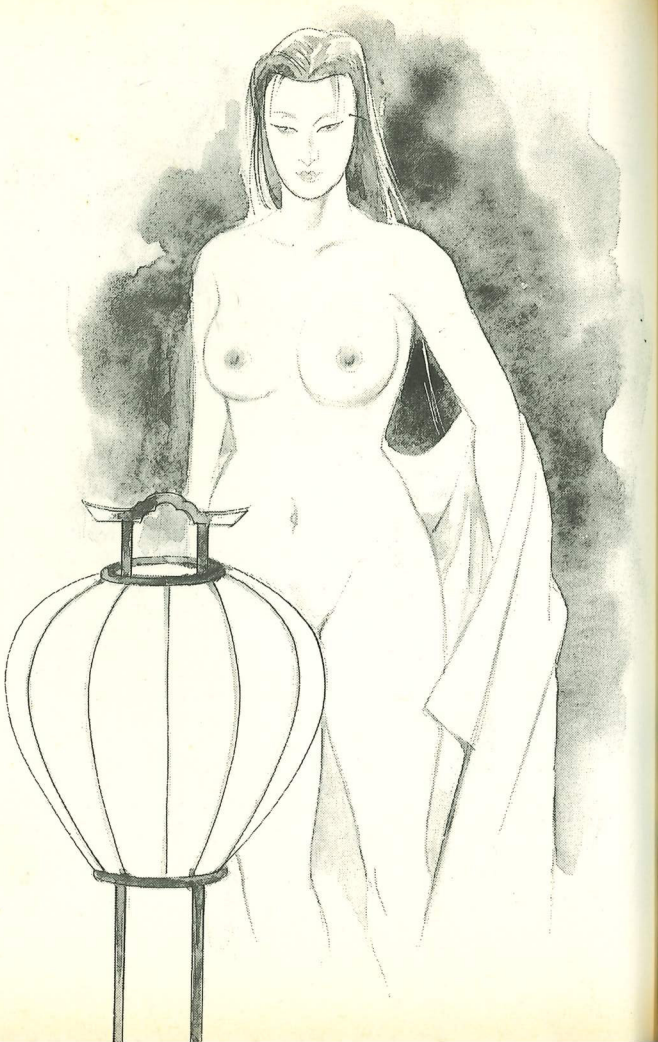
「お連れいたしました」
「志乃か　ここで裸になれ　そちの肌に刺青をしてみせるのじゃ　おけい　この肌に何を彫ってみせる」
「さらば歓喜天を」
「なに歓喜天を　ほほほ…歓喜天とはいかにもこの女にふさわしい図柄じゃ早速にこの場で彫って見せい」

行燈の光に妖しく
女体をくねらせる志乃

「ああ……」
「刺青の針の刺激も
この加賀屋の後家
志乃の体には心よいと
みえるな」

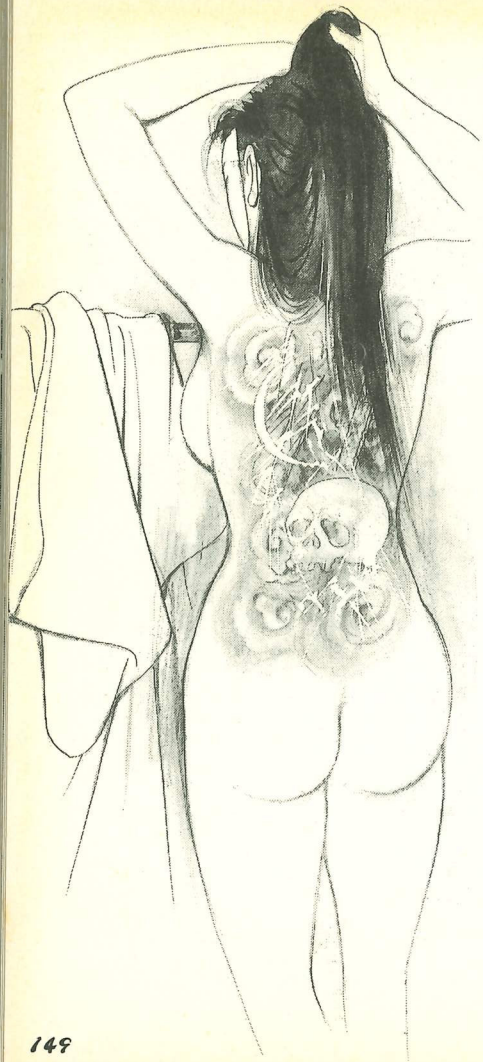
「なんともはや…」

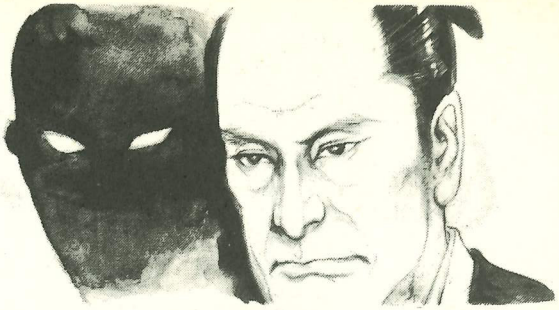
「おけい　今度はわらわの肌に墨を入れてみよ」
「それはなりませぬぞッ」
「なぜじゃ」
「身分のあるお方のなさることではありませぬ」
「爺よ　身分はどうあれ醜く生まれついたこの体をどうさいなもうとわらわの勝手じゃ」
行燈の明りに惜しげもなく曝した能面の裸身は女体であった
「姫ッ！」
「おけい…この体に世を呪いわが身を呪う髑髏を彫ってたも」



「なに夕姫が刺青を」
「は　はい　それも世を呪い己れを呪う
髑髏の図柄を背中一面に」
南町奉行　矢部駿河守の役宅で夕姫の用
人三村庄左衛門は平伏していた
「大御所家斉公の御子とはいえ生まれな
がらに顔に醜い痣(アザ)をもってお育ちになら
れた夕姫が　絶えず人の目に触れるのを
嫌い屈折した気持ちになってゆかれたこ
とは分からぬでもない　だが　あまり御
乱行が過ぎては行末が案じられる」
色好みの家斉が側妾にうませた子女が五
十三人　それぞれ各藩に苦労して分配し
たのは時の老中水野忠成であったが只一
人夕姫だけが残された。左半分の顔のア
ザが禍(わざわ)いしたともいえるが　何よりも夕
姫自身が嫁ぐことを拒絶したことによる

家斉が逝き家慶が将軍となってからは権力の構造が一変した
まず家斉のお側用人として　権力をほしいままにしていた水野美濃守が失脚　つづいて若年寄
林肥後守忠英　御納戸頭取　美濃部築前守が処分された
夕姫の素行に寛大だった幕閣が次々と要職から切離されていったのである

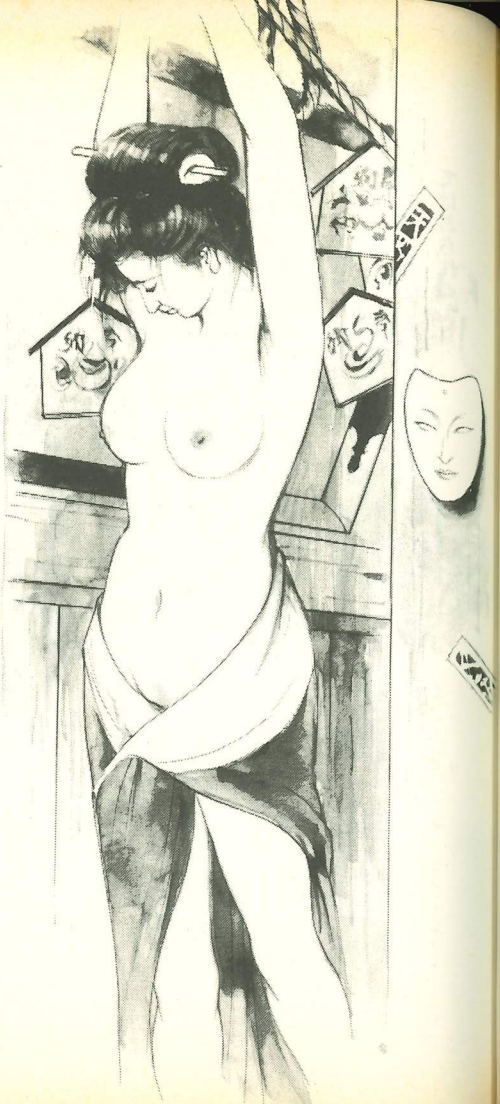




すべて新閣僚となった水野越前守の工作による
そしてその影に世に妖怪といわれた目付　鳥居耀蔵
がブレーンとして奸策を進言していた
「今度罷免されるのはこの儂かな」
「えッ　お奉行が」

「鳥居がな　わしの後釜に座わりたがっている　いずれわしの落度を探しまわって追い落としにかかるだろうな　そんな時だけに夕姫の素行が町奉行としてのわしの落度にされかねないのだ」

そんな折加賀屋の後家志乃が絵馬堂に死体となって吊されている事件が起きた
檜九十郎が矢部駿河守の役宅に呼ばれたのはその晩だった

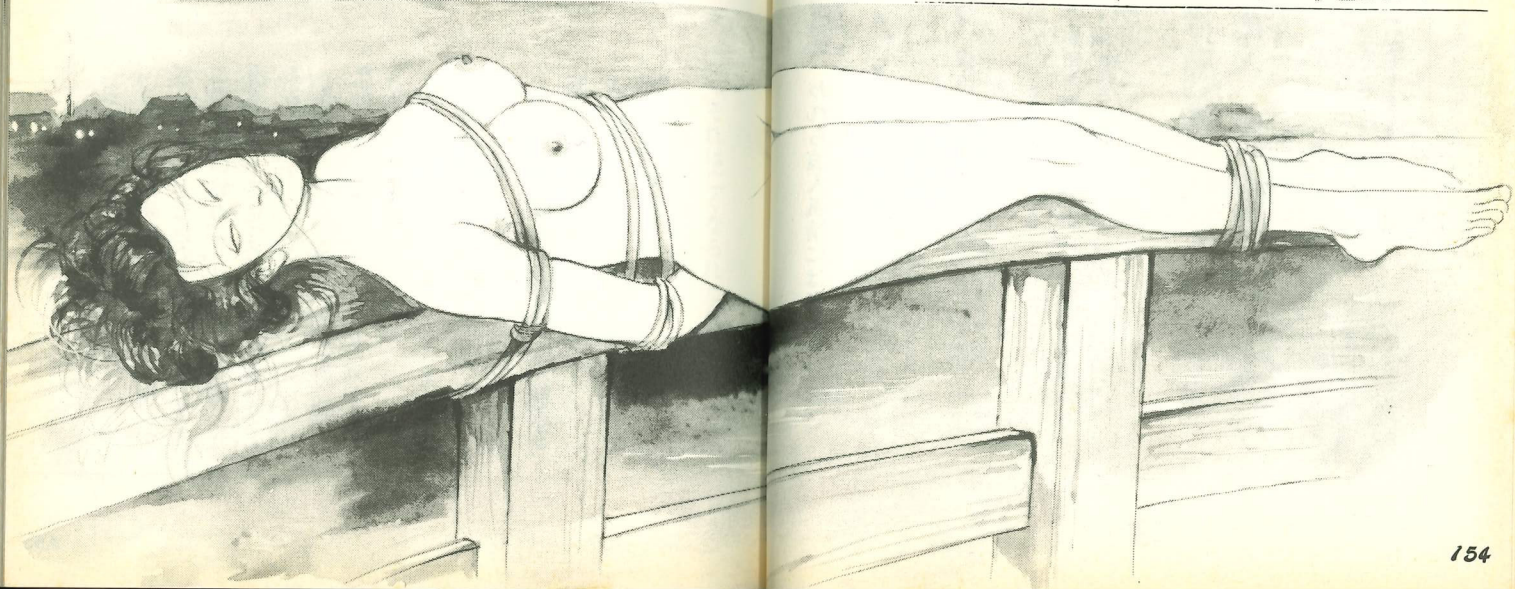


「お奉行　急なお呼出しのご用向きは」
「む　近頃抜け荷の科で闕所となった加賀屋の後妻志乃とか申す女が絵馬堂に吊されて死んでいたが　柱に能面が打ちつけられていたというのはどうゆうことなのだ」

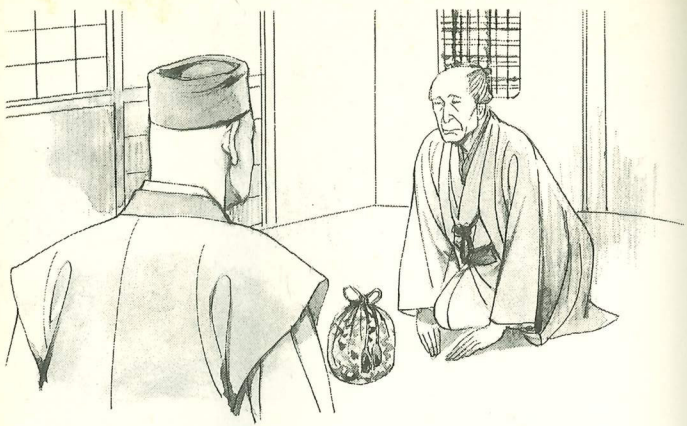
「お奉行　それをもってあのお方の所業とお考えのようでしたら　それは違います」
「ウム　夕姫の監視　警護役として　絶えずお側についているそちの言葉を信じよう…だとすると　これはやはり鳥居の筋か？」
「鳥居！」
「大塩平八郎の天満騒動では　そちの父を巻きこんで罪に落とした鳥居耀蔵が老中水野越前守様の羽根の下で奸計を巡らし　儂を蹴落として　後釜に座わろうとしている　つまり　夕姫の所業を市中取締不行届として　わしの罪にして陥れようと計っているのだ」
「市中取締りの廉（カド）ならば北町奉行の遠山左エ門尉様も同様に…」
「あれはな　この矢部駿河と違って　右を向けといえば右　左を向けといえば左　上からは利用しやすい男なのだ　わしのように　事によっては上に噛みつく者はとかくうとまれる」
「そうゆうお奉行のご気性に惚れて　手前はいわれるままに今日まで従ってきました」
「わしが睨まれる理由がもう一つあるのだ　水野越前守様が老中になるために大奥への工作資金調達のために　ある北の藩から多額の賄賂を受取ったのをわしが知っているからだ　それをあばかれては老中といえども枕を高くして眠ってはおられぬ」

「フン　上のやっていることは魑魅魍魎　われら浪人風情には考え及ばぬことばかりだ」
「それが　そなたの父の後を継げという　わしの勧めを断わる理由だったのか」
「初めは　仕官も望んでみたが　所詮　役人は上から押しつぶされて親父のようになるのが落ち」
「人を蹴落としても出世してくる　鳥居のような者もいる」
「そうゆう亡者になりたくなくて今の無頼の生活の中で生きている　だが　今度の事件が鳥居の策謀だとしたらそいつを探ってみせましょう」
「頼りにしているぞ　九十郎…」

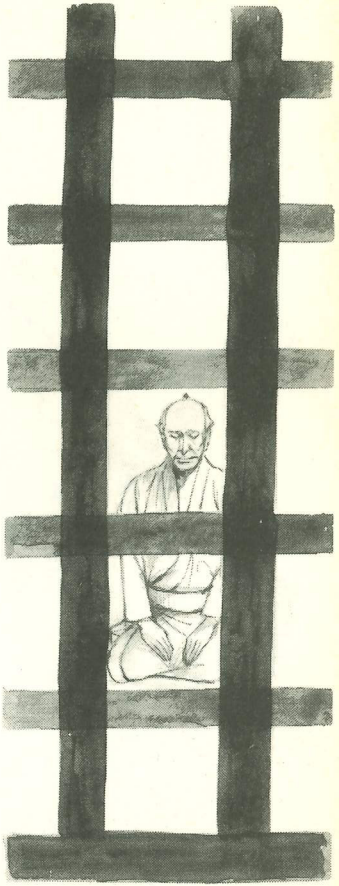
「ちょいと　お町の旦那」
「なんでエ　夜鷹か　役人に声をかけてくるなんて　おめえもよっぽどしけていやがるようだな　こっちはお役目だ　子連れの夜鷹を抱いてる暇はねエんだよ」
「いえ　旦那　この子の姉が二、三日前からいなくなッて　毎日お腹を空かしながら姉を探してるンです」
「フーン　そいつは　かわいそうにな」
「なンとかこの子の姉を探してやッて下さいな」
「よし　分ッた　分ッた　坊主　これでな　そばか　うどんを食ってきな」
「旦那ア～～ッ」
「番太の小助か　どうしたい　息をきらして」
「若い女が永代の欄干に裸で～くられて死ンでますぜ」
「なンだって！」



「元締め　また天目ですか」
「この天目茶碗はな　こうして陽にかざしてみると七色の光に輝いてみせるこの妖しい魅力にとりつかれると　何度手にとって見ても見あきぬ美しさがある」
「そのためにとんだ約束ごとをしましたね」
「ウム　汐見屋のことか」
「あの日番頭がこっそり訪れてな」
「宗匠　この茶碗と引換えに大恩ある旦那さまの仇を討って下さい」
「番頭さん　どこで私の元の稼業をきいてこられた」

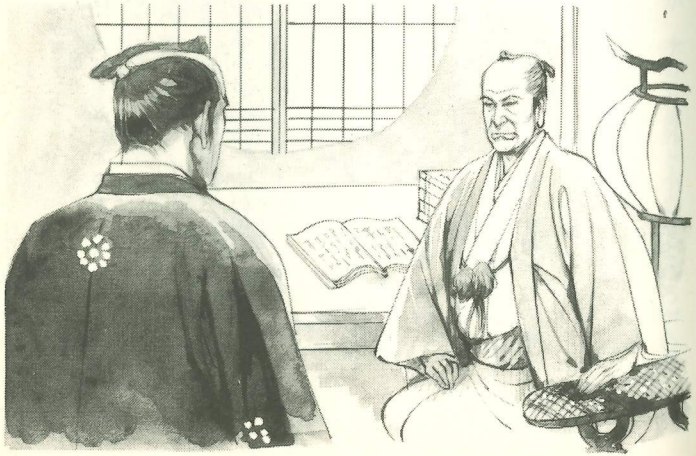


「それは亡くなられた旦那さまから」
「フム　汐見屋さんが　ここに茶を習いにきているうちに　いつのまにか感づかれていたのか…それにしても　この天目茶碗どこで手に入れられた」
「旦那さまは　堅い商いをされる方でした　だが一度だけ抜け荷をしたことがあります　この茶碗のために」
「ウム　汐見屋さんも　その茶碗の魅力に負けたか　無理もない－
「店が闕所となり　家財没収になる前に手前がこの茶碗を持出して来ました　手前の願い聞きとどけていただけますか　聞きとどけて頂かなければこの茶碗　手前が持っていても宝の持ち腐れ　今　ここで割ってしまいます」
「待て　待てッ　待ってくれ」

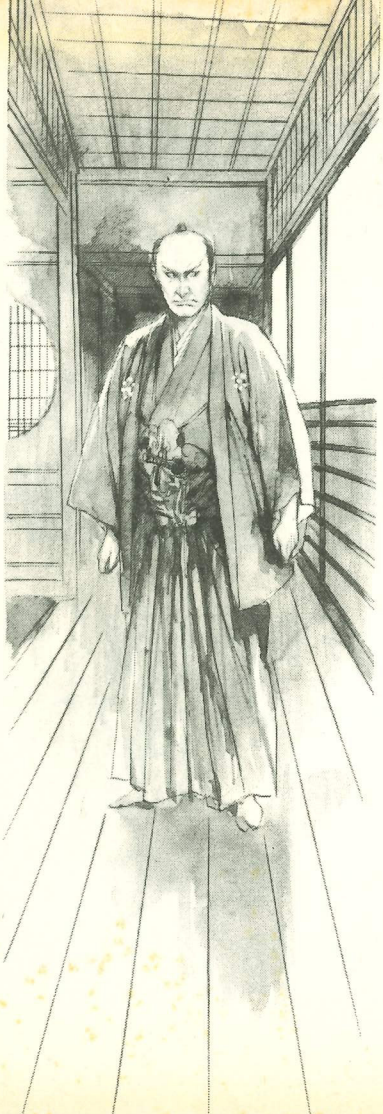


「そこで能面殺しを引受けさせられた」「う〜ン」
「ところで　その番頭さん　いまどこに？」
「闕所（けっしょ）の家財を勝手に持ち出した科（とが）で　いま牢に入っている　約束を果たさなかったらわしのことを洗い浚い　牢中でわめき散らすことだろうな」

この夜　鳥居耀蔵は　水野越前の屋敷を訪れていた
「調べものでございますか」
「ウム　これから行う改革についてな」
「ところで矢部・遠山の両奉行にお会いなされましたか」
「会った　今度の改革には　南北両奉行の協力が是非とも必要なのだが　北の遠山はともかく　南の矢部駿河がとかくに小うるさい意見を持出してきてな」
「この際　矢部は切り捨てることです　代わりに手前を南町奉行にして下されば　いくらでも協力できることでございます」
「しかし　矢部は清廉潔白な男だ　そ

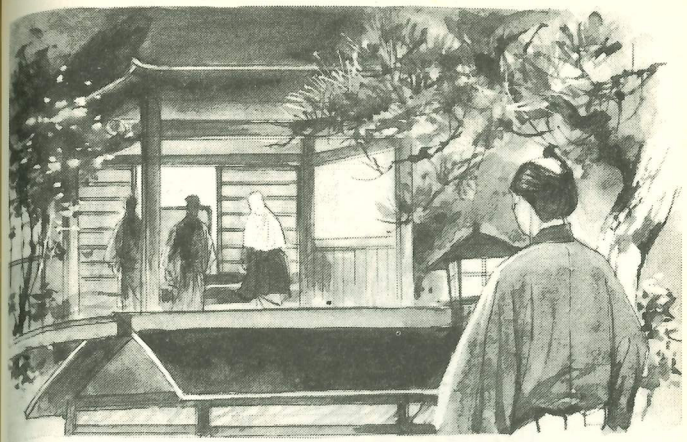


れに　近年にない名奉行として　江戸市民の人気も高いときく　そうゆう男を落度もなく失格させることは無理ではないか」
「落度がなければ　こちらから作ればよいのです」
「こちらから作る？」
「左様　ただいま江戸市中を騒がせております夕姫様の件にからめて」
「ナニ　夕姫の……」
「場合によっては　夕姫様も亡きものに」
「ま　待て　仮りにも夕姫様は　ご先代家斉公の御子であるぞ　そのお方を亡きものにするなどできることではない」
「しかし　夜な夜な市中に現われては　ご乱行の数々　このまま放っておいては　やがてはご政道の禍根の種となりましょう　それに　夕姫様の最大の庇護者であった水野美濃守はすでに失格　現在高遠に流されていて　今や権勢を誇った水野越前守様が　誰にはばかることがありましょうや　すべてこの鳥居耀蔵にお任せを……」
「む…しかし　無理をすまいぞ……」



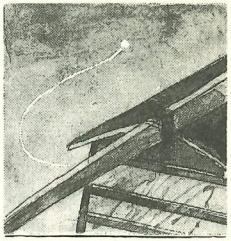
―フフ　無理をしないで成る事があろうか　水野も意外と小心なところがあるな―
屋敷を辞す廊下を歩きながら耀蔵の呟きが　これであった

耀蔵の胸の裡にはすでに　矢部追い落としの筋書きはでき上がっていた
この際どんな強硬策をとっても駿河守から町奉行職を奪いとってやるのだ
そして耀蔵の最後の望みは勘定奉行への栄達であった



「ご用人さま　お屋敷での役目がすみましたので　私はこれでおいとまを」
「ご苦労だった　駕籠を用意したので乗ってゆくがよい」
「ありがとうございます」
「あ　待ちなさい　何やら衣の袖の中で光るものが？」
「ああ　これは螢でございます」
「螢!?　ほう　これはまた風雅な」
灯影の中で螢尼おけいの顔が白く微笑んだ

「その駕籠待て」
「あっ！」
武士は能面をつけていた
「うせろ」駕籠かきは一散に逃げる
武士の手の白刃が一閃　駕籠を貫く
「ウウッ」



うめき声と共に駕篭の中から闇に一条の光りを引いて螢が飛び去った
「む　螢が…」
「見たぞ　能面」背後からの声
「む……」振りむいたそこに九十郎が立っている

「近頃　人騒せな殺しをやって歩くのは貴様か…誰の指図でやっているのだ
鳥居耀蔵か　それとも老中水野越前かいわなければ　その能面の下にどんな面が隠されているのか見てやろうか」
「小癪なッ！」
挑みかかった能面の武士は九十郎の抜打ちの一閃を浴びて　血汐の中に崩れ倒れる

と……一斉に闇の中から涌き出たように数名の能面武士が檜九十郎を取囲んだ

「ホウ　これは揃いも揃ったものだなさては　うぬらが仮面をかむって市中を騒がす元凶か　やはり鳥居の筋か」

「問答無用ッ」
「何ッ」
「斬れッ」
「斬れるか　この俺が」
「ダーッ」
抜きつれた白刃が闇の中で数条の光芒をえがいて九十郎に襲いかかる

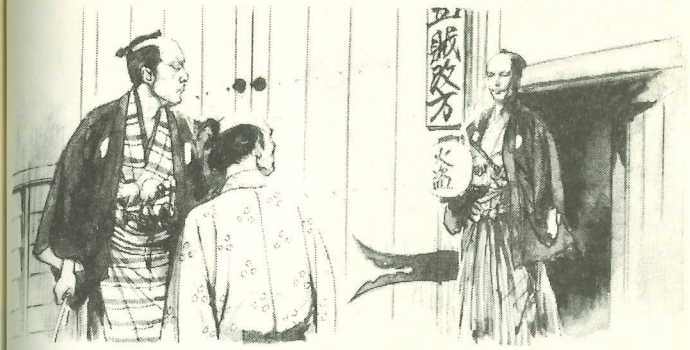
「旦那　能面が　いっぱい」
「ウーム」
「これは　一体　どうゆうことなんで」
「おれにも分らねエ」
「ひとり相手をしているのは？」
「あいつ　どこかで見た覚えがあるな」

刃と刃が触れ合って火花が散り二つに
割られた能面が血の中に飛ぶ

「強いッ　あの浪人いつか能面の供を
していた男だぞ」
「旦那　能面がひとり抜け出してゆき
ましたぜ」
「よし　どこへゆくか後をつけろッ」

「おやッ　旦那　あいつ妙なところに
入り込みましたぜ　あそこは火付盗賊
改め方の屋敷だ」
「ウ〜ム　まさか盗賊改め方が　能面
をつけて出歩くとは……」

火付盗賊改め方とは若年寄直属の組織で　老中直属の町奉行所とは全く別の組織　もっぱら凶悪犯を捕える特別警察の役目を果していた



「お主ら　町方の者だな　そこで何をしている」
「いや　そこまで　曲者を追って来たので」
「ここはお主らの立入るところではない　あっちへゆけ　あっちへ」

「ケッ　あの野郎町方を野良犬扱いにしやがって」
「フフフ　神崎の旦那　軽くあしらわれましたね」
「おめえはお吟ッ　どうしてここに？」
「あたしもチョイと　能面に関わりがあってね」
「おめえが能面に？」
「探ってみると分らないことばかりだね　分らないといえば　火盗の動きも分らないね」
「おめえもそう思うか」

「まさか　火付盗賊改め方が　能面の件に関っているとは思えないが」
「ご覧よ　火盗が動き出したよ」
「ほンとだ　これからどこへ　押しだそうてンだ」

ドドドド

「ソレッ　あの者を引ッ捕えい　手に余れば　斬り捨ていッ」

「なンだと　火付盗賊改め方が　この檜九十郎を捕えるだと?」

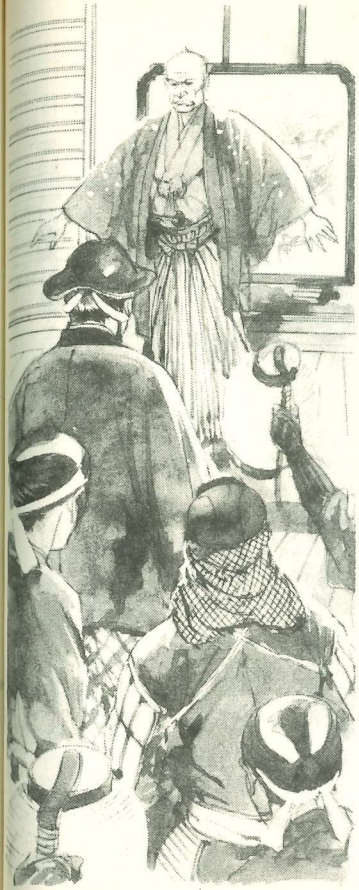
「火盗改めが何故　このおれを　おめえたちが捕えるのは　偽能面の方じゃねえのかい　それとも……はは～ン　読めたぜ　手前たちを裏で動かしているのはやはり妖怪だな　そうと分れば問答無用だな　刀の折れるまで付合ってやるぜ　それゆくぜ　下司役人どもッ」

「お柳ッ」
「誰だい」
「俺だ　俺だ」
「九十郎ッ！」
「み　水を飲ませてくれ」

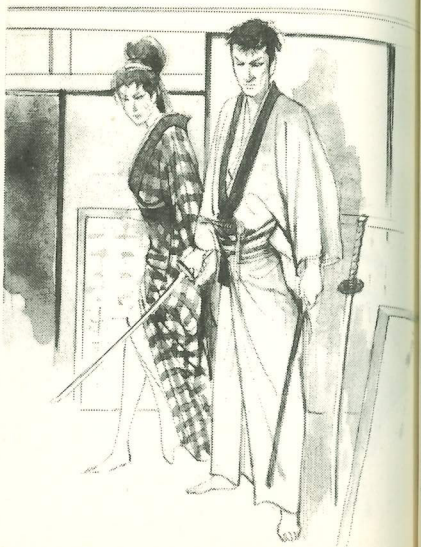
「一体何があったンだい」
「火盗改めを相手にひと暴れしてきた」
「火盗と？」
「偽能面を使って火盗と組み　夕姫をダシにして江戸市中を騒がせ　南町奉行　矢部駿河守の失脚を狙っているのが　鳥居耀蔵だ　老中　水野越前を楯に火盗支配の若年寄を抱込んでいるのはすべて　妖怪鳥居耀蔵の策謀だ　でなければ　火付盗賊改めが動くはずがない　火盗は騒ぎに巻き込んで　夕姫を消しにかかるかもしれない」
「なンだって　夕姫を!?」　ドドドドド
「来たぞッ　火盗が」

「騒々しいッ何事じゃ　当屋敷をなんと心得る　いやしくも　御先代様家斉公の御子夕姫さまの御屋敷じゃぞ」

「だまれ　身分のあるお方が能面をつけて　夜毎非道を働き歩くわけがない　当屋敷に曲者が追われて逃げ込んだのを　見届けているのだ　この屋敷を　曲者の巣窟とみて火付盗賊改め方が　役目として捜索する　それッ踏込め　手向う者は　斬り捨ていッ　何者であれ容赦をするなッ」　ドドドドド



「お　おのれッ　火盗ずれが無礼を働いて後悔するなッ　姫　姫～ッ」

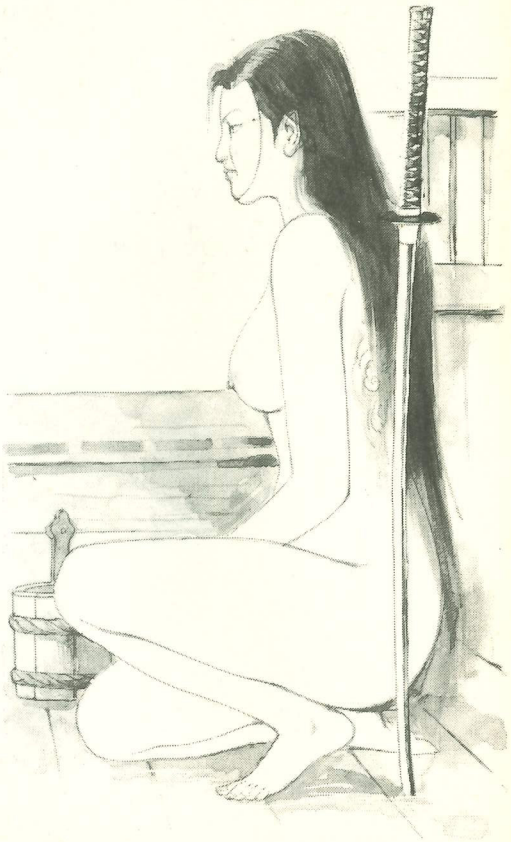


「お柳　姫はどこだ」

「たしか風呂場に」

「姫を守れ　俺はここで奴らを食い止める」

「あいよ」



「姫ッ　姫～ッ」
「爺　うろたえるな　わらわの覚悟はもうできている」
ドドドドド……

「おのれッ
ここは通さん
通さんぞッ」

ドドド
「いたぞーッ能面が」
「下司ども　寄るなッ」

炎の中で火盗を相手に阿修羅と化した夕姫の白刃が躍る

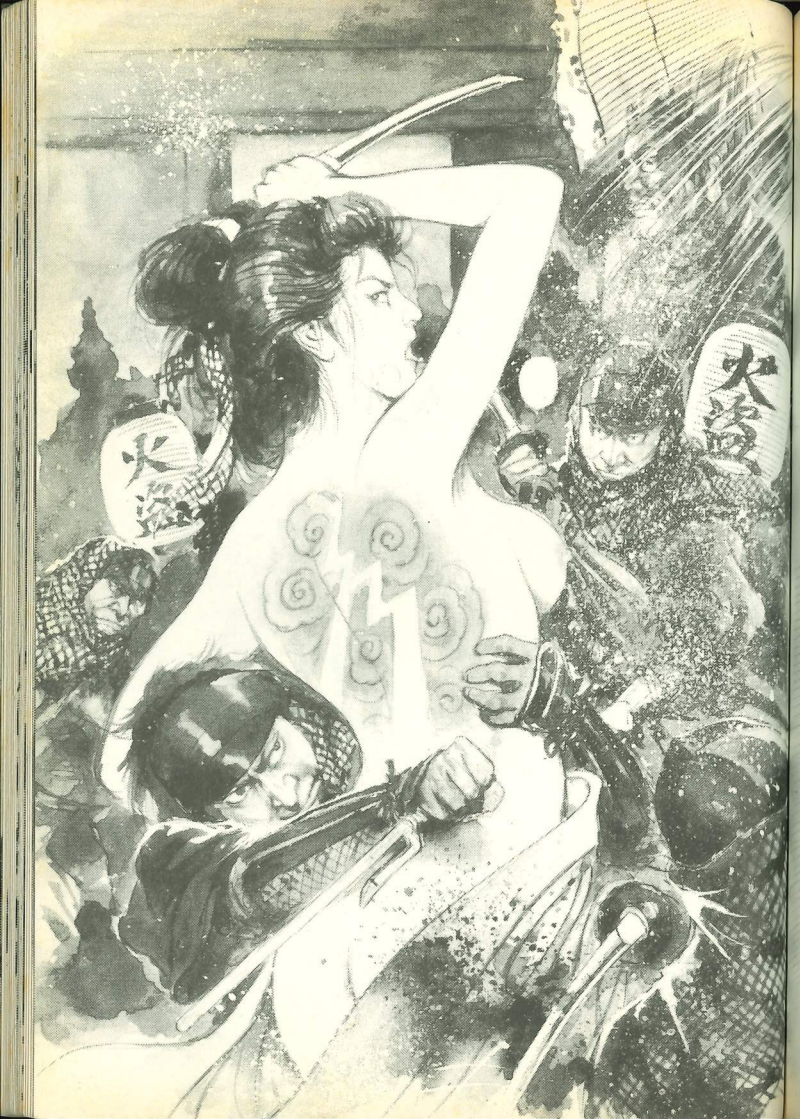
「爺　さらばじゃ　世を拗ねて　したい放題のことをしてきたが　人を斬ったのは今が初めてじゃ　もはや　この世に未練はない　背中の髑髏を道づれに地獄へゆく」

「姫ッ……!!」

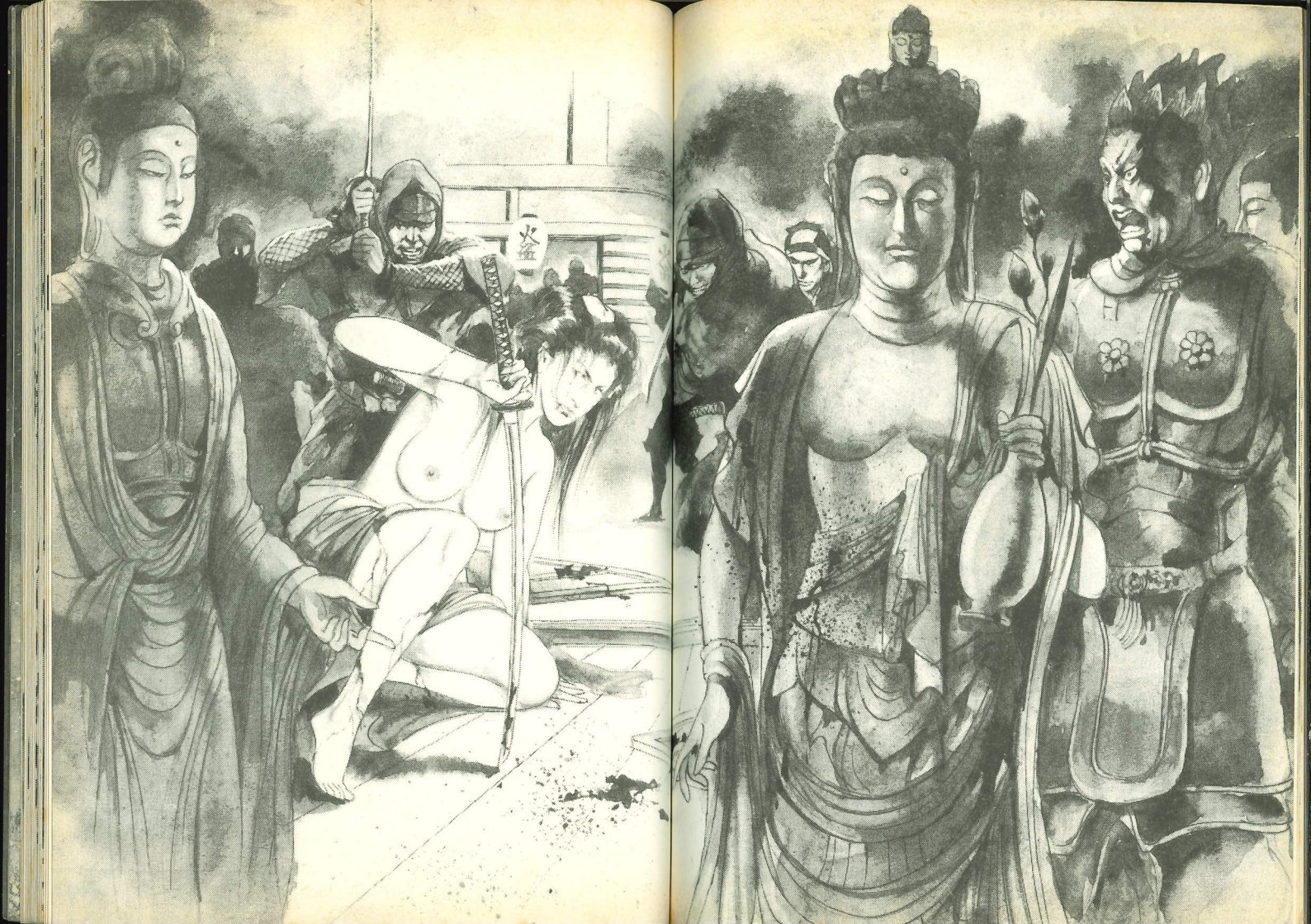
「お柳　姫は？」
「風呂場の火に包まれて果てたようだよ」

「どうやら　この屋敷もこれまでだな」
「この分では赤不動のところも危ないぞ　お柳　命があったらまたどこかで落合おう」
「あいよ」
ゴ～～ッ

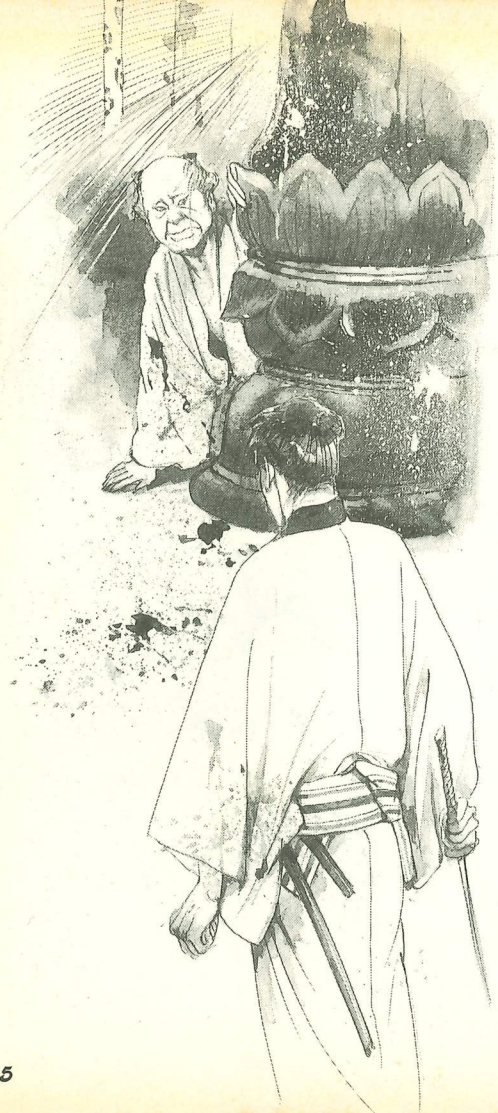
「仏に囲まれて　この
歓喜を味わえるのは
仏師玄択に与えられた
極楽じゃ　のうお政」
「あァ～元締めさま」



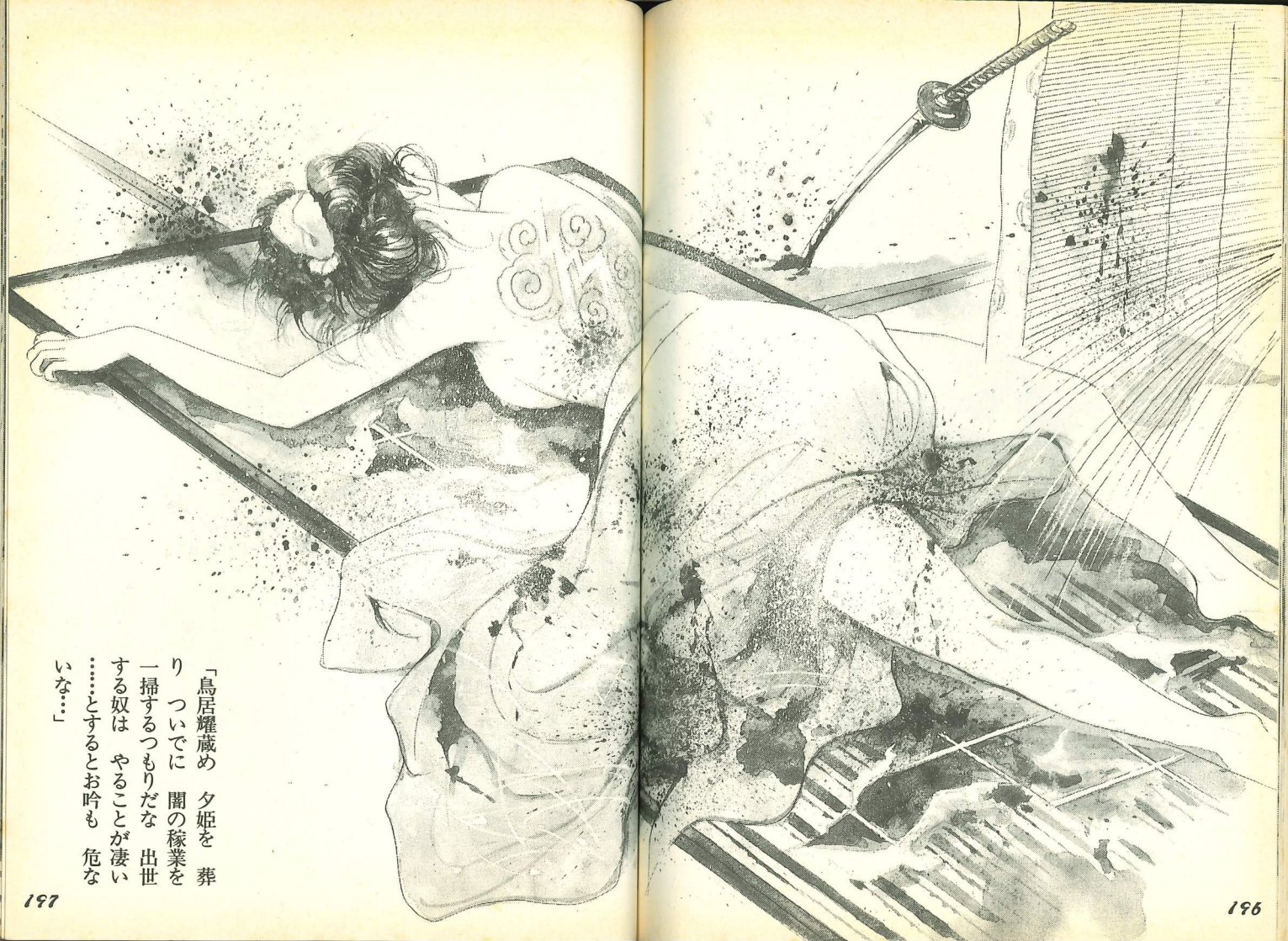
「元締め　元締め～ッ」
「さわがしいッ　何事だ」
「火盗改めの手入れだッ」
「ナ　なにッ　火盗だとっ」
ドドドドド
「神妙にしろ　闇の稼業人ども　刃向かえば斬り捨てるぞっ！」


火盗

「赤不動ッ　玄択ッ　どこにいる」
「ここだ　ここだ」
「どうした？」
「火盗改めに　踏込まれた」
「やはり！」
「竜神の辰　お役者丹次　目ぼしい手駒を全部殺られた」



「ウーム　お主から借りた螢尼のおけいも　屋敷からの帰りを　偽能面に駕篭の中で突き刺されて死んだ」
「おけいもか……」
「そこに倒れているのは」
「雷のお政だ」



「鳥居耀蔵め　夕姫を　葬り　ついでに　闇の稼業を一掃するつもりだな　出世する奴は　やることが凄い……とするとお吟も　危ないな…」

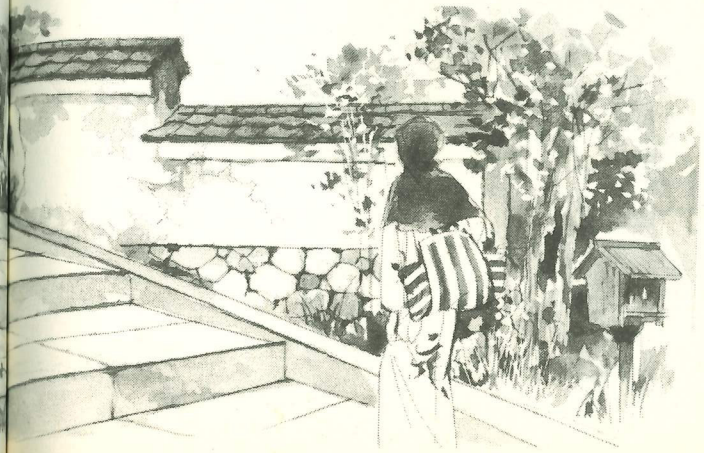
「おい　そこへゆくのは　お吟じゃねえか」
「おや　神崎の旦那　また会いましたね」
「これから　家に帰るつもりなら　そいつは止めたほうがいいぜ」
「なぜ？」
「おめえの住まいが火盗に取囲まれているからよ」
「えッ　火盗に…それで新三は？」
「あいつのことだ　うまくすり抜けて逃げ回っていることだろうよ　いけねえ火盗がこっちへくるぜ　おそらく新三を追い回しているに違いねえ　お吟あそこに神輿倉があるからそこに隠れていろ」
「旦那　今夜はばかにやさしいんですね」

「お吟　おれがおめえに惚れてるとでも　いわせてエのか　おれは色恋でお役目を左右する男じゃねえぜ　ただ町方をコケにする火盗の奴らが気にくわねえだけよ」
―フン　とかなんとかいッて　あいつ　あたしに首ッたけのくせに……

「誰?そこの隅に隠れているのは」
「姐さん　あッしだ」
「新三　無事だったのかい」
「驚きましたぜ　いきなり　火盗に踏込まれたときには　奴ら町方と違って　やることがきつい　いきなり斬捨てご免でくるからね」
トントン
「誰だ?」
「神崎の旦那だよ　開けてやんなよ」
ガラリ
「なンだい　新三おめえ生きていたのかこの辺一体町方もまじって　蟻のはい出る隙もねエ　東の方が手薄だからあッちへ逃げろ」
「神崎の旦那　恩に着るよ」

「チュッ」「あッ　お　お吟」思いがけぬお吟の口づけ
「旦那　お吟のおさしみの味どうでした」
「ばッか野郎　悪りイはずがねエだろう」
ボンボーンボボーン
「旦那　花火が」
「今年はご改革とかで　花火も禁じられているのに捕まるのを覚悟で打上げるとは威勢のいい花火師もいたもンだ　江戸ッ子はこうでなくちあ　いけねえや　どんどん上げてくれ玉や　鍵や～ッ」

「姐さん
こっちも役人
が張ってます
ぜ　ふたり一
緒じゃまずい
ようだ　あっ
しが囮になっ
て走るから
姐さんはその
隙に別の方に
逃げて下さ
い」



「新三　捕まるンじゃないよ」
「任せておきな姐さん　ほとぼりがさめたら　また会いにゆきますぜ」
「新三…」

「お吟　おめえも火盗に追われて逃げ回っているようだな」
「その声は？」
「そうさ　おめえに恨みを持ってるお柳さ」

「きょうこの日まで　おめえと出会うのを楽しみにしていたぜ　この片目の恨みを晴らしてやろうと思ってな」
「相変わらず勝気だけど　檜九十郎をそっちにくれてやった代わりに　その片目をもらったのさ　ケリはついているはずだよ」
「それはおめえのいい分だ　そんなことでこっちの気は納まらねえ　あんときは酔って不覚をとったけど　こんどはあたいが　おまえの片目をつぶしてやる番さ　覚悟しなッ」

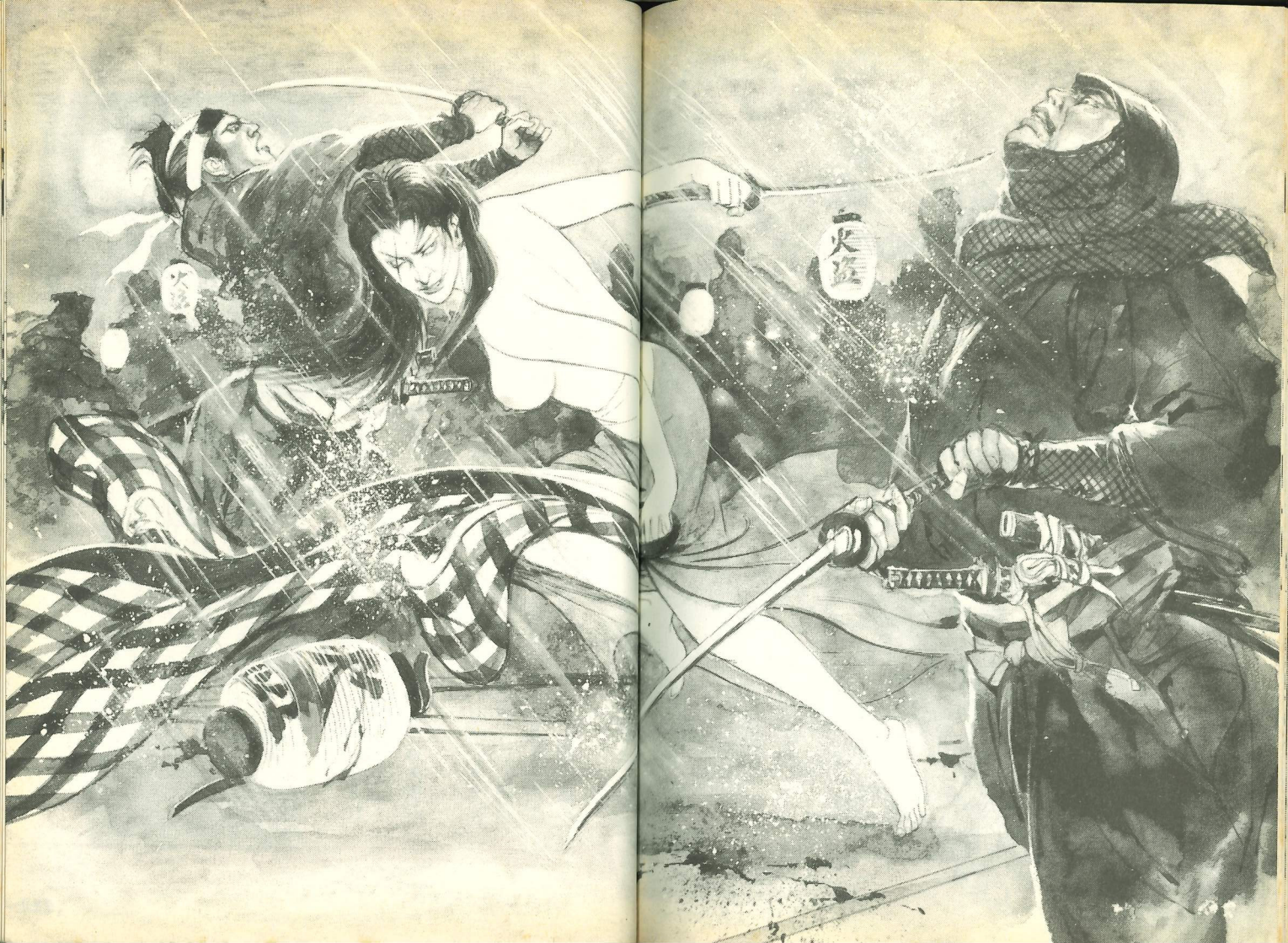
お柳の刃がお吟のお高師頭巾を切り払った　余す勢いで地蔵の片目が

「それまでだ　斬合いは　やめろッ」

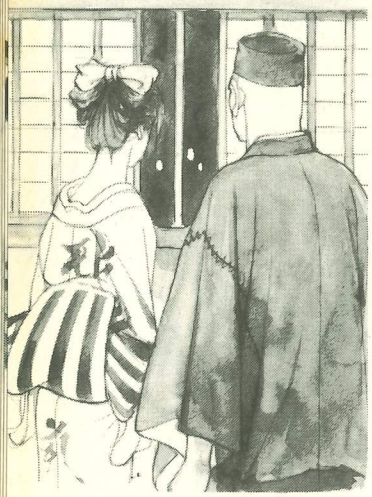
「元締め！」

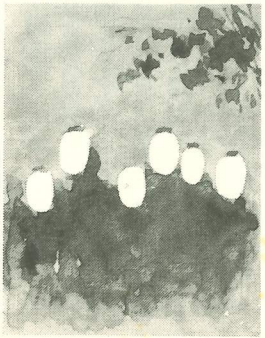
「いま明かすが　おまえたちは　それぞれに片親は違っていても　血を分けた姉妹なのだ」
「なンだって?」
「恨むなら　このわしを恨め」
「嘘ッぱちだ　あたいが　お吟なンかと姉妹であるはずがねエ」
ゴロゴロ　ピカピカッ
「今頃なにをデタラメいやァがる」
ザーッ　ザーッ

「徳右エ門のバカヤローッ　あたいがお吟なンかと姉妹であるはずがねえッ」



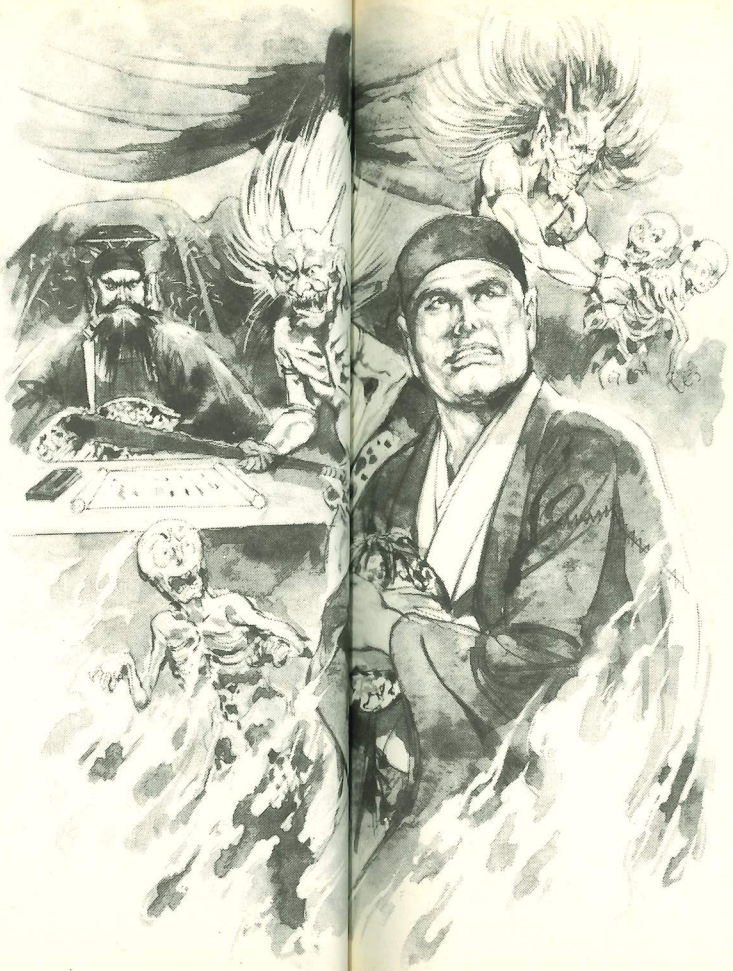
「お吟　先日　妙な男が訪ねてきてな
こちらに天目茶碗があるときいて　是
非拝見させてくれという　こいつまた
赤不動が差向けてきた刺客かと思った
が　今考えると　あれは火付盗賊改め
方の密偵(いぬ)だッたかもしれぬな」
「それで　赤不動や　わたしの家まで
も　火盗が押しかけた」
「いずれ　この茶室も盗賊方の手入れ
があることだろう」
「もう来てますよ　家の回りは火盗の
提灯で火の海」
「ほう　もう来たか」
「お柳は　うまく逃げてくれたかね
あのときのお柳は　わたしたちを逃が
すために　わざと囲みの中に躍り込ん





でいったのでは」
「かも知れぬな……おまえたちを闇の稼業に引きずり込んでしまったのは　このわしだ　許してくれ」
「何を今更　捨て子同然の私達を幼いうちから育ててもらって　恩にはきても恨むなンて……」
「そういってもらえば気が楽になる　おまえは抜け穴から逃げろ」
「元締めは？」
「わしはもう年だ　この人数の捕り方から逃げ回る体力も気力もないわ」

「この茶碗を道づれに　地獄に落ちても惜しい命ではない　しかし　わしがこの茶碗に魅せられたばかりに無用の血を流した　妖変天目茶碗とは罪つくりな名器じゃな…さて　死場所は　地獄の間　極楽の間にするか…いや…わしは閻魔の前で裁きを受けるのがふさわしいようだな　はっはは……お吟　さらばだ　おまえは生きのびろ…生きて　新しい生き方をみつけるのだ」

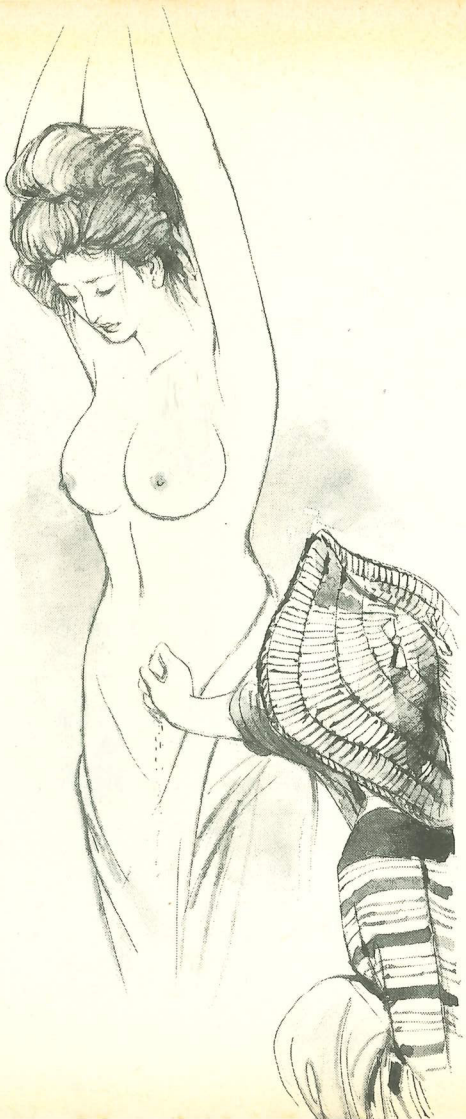


ゴーッ
「元締め　もしや　あなたは　わたしの父親なのでは?」
遠く茶室が徳右ヱ門を包んで燃え落ちようとしている

「お吟　無事でいたか」
「あなたは　九十郎…」
「ここにぐずぐずしてはいられないぞ
…やつらは俺が引きつけておくから
その間に　おまえは逃げろ」
ドドドド「来たな」
「九十郎ッ」
「お吟　早くゆけッ」

「神崎甚内　扇売りの新三
お柳　元締め　檜九十郎
みんなあたしを逃がしてくれるけど　あたしを逃がして　これからどう生きろというのさ　あたしも花火のようにパッと開いてパッと消えてしまいたいよう」

数ヶ月が過ぎた　江戸は両国の盛り場
「さあ　お立会い　七色に染めたこの
白割砂で　これからあたいが描く砂絵
をよ～くみておくれ　チョイト　そこ
の助べそうな旦那ァ……」
「ああ…おれのことかい」
「あたいの股ぐらばかりのぞいてない
で指先を見ておくれな」
「いいとも　そのかわり思いきり
艶っぽいのを頼むぜ　姐さん」



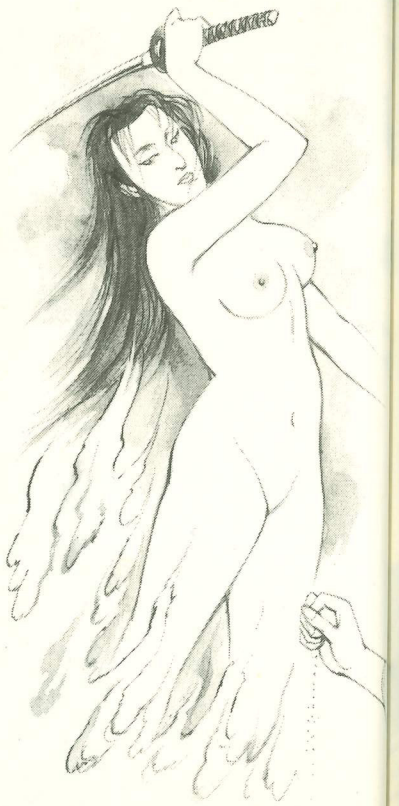
「旦那も好きそうだね　それじゃ描くよ　まずは　しの姥桜（うばざくら）　絵馬堂の怨み
ぶし……」
「うん　うん　うん……」

「お次は　永代は欄干上の　もみじちらし　つづいて能面夜叉は　炎の舞い…この女たちは　みんな殺されているンだ　誰に殺されたかって　妖怪の面をかぶった　南の奉行　鳥居耀蔵さ」

「おッと　待ったッ　その名まえを出されちァお役目の手前　だまって見てるわけにゃいかねえな　ちょいと　来てもらおうか　そこの番屋まで」

「ここは　神輿倉　旦那　妙な番屋に連れ込むんだね」

「おまえの正体をあばくには　ここが一番いいと思ってな　とってもらおうか　その鳥追い笠を」



「旦那　あたしの面体を確かめて　どうさなるおつもり」

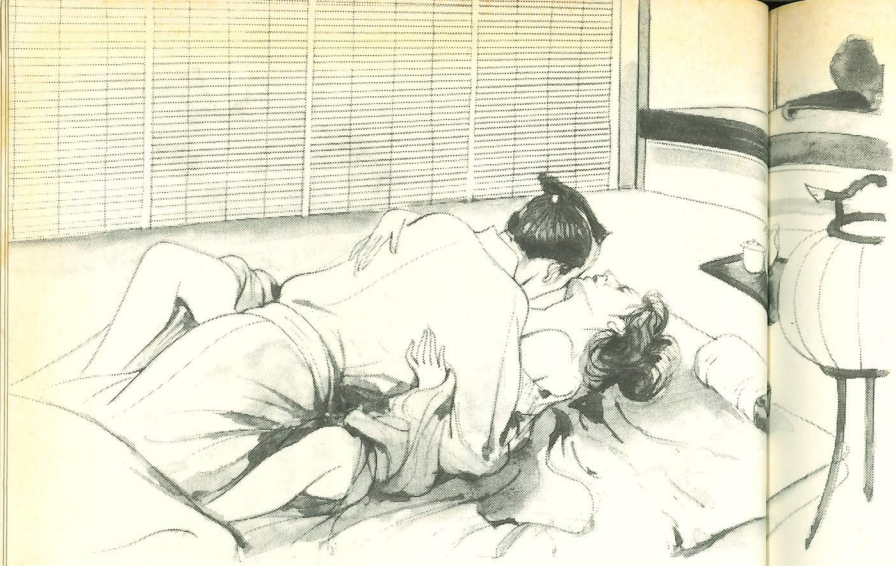
「さて　どうしようかな」

「笠の下は　こんな顔だけど　お気に召しましたか」

「お柳ッ」

「やっぱり　おめえか　てっきりそうじゃねえかとさっきは　太ももの刺青をのぞきこんで見てたンだが　おめえたち　ここしばらくの間　姿を見せなかったが　またぞろどこかで仲間が集って　悪さをしようと相談していることは　こっちも　うすうす感づいていたンだ　狙う相手は分ってる　南のお奉行　鳥居耀蔵…図星だろ」

「！」



小屋の隅でお柳とは別の影が三つ　かすかな気配でうごめいた

「今のお奉行はな　名奉行で人気があった　矢部駿河守さまを押しのけて今の地位に座ったお方だからやることが　前の矢部様とは違う　近頃は　金座の後藤三右ヱ門のところに　ちょくちょく見廻りと称して出かけては　帰りには山吹色の大判をズシリと袂に入れてもってくる　ついでに女も抱かせてもらっているに違いねェ……気に入らねえンだよなア　俺たち下ッ端の役人としては……」

「今夜も三右エ門の寮にゆくそうだが　まあ　おめえたちが狙うなら　その帰りの駕篭を襲うのが　いいんだろうが　そうゆう　とんでもねえこと仕でかしたら　ひとり残らず引っ繰って獄門台に送ってやるから　そのつもりでいろよ」

「なンだい　あいつは　べらべらと　ひとりで喋っていっちまったが　役人のくせに　一体どっちの味方をしているンだ」

「フン　ああはいっても　歯っ欠けの旦那は　前のお奉行の矢部党なのさ」

神崎と松が戸口の外に消えるのを待って　小屋の物陰から姿を見せた　お吟　新三　九十郎　それぞれの顔が　好意に満ちた笑顔でふたりを見送っていた。

「おおい　神崎」

「これは　与力の瀬尾さま」

「女砂絵師をしょっ引いたそうだがまさか逃がしたのでは」

「え！」

「めっぽう　艶っぽい砂絵を描いてお奉行の悪口をいうので大そうな人気だそうだが　俺もたまには　役目を離れて　そうゆう唆呵の一つもきいてみてえと思ってな」

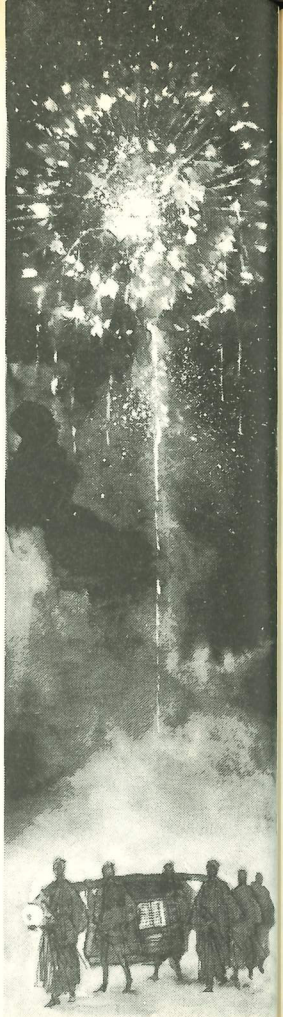
「すると　瀬尾さまも　矢部党で」

「前のお奉行にはずい分と目をかけてもらった　今のお奉行は何かと気に入らねえ　早く誰かと代わってもらいてえよ」

「ホッ…それをきいて安心しました」

「すると　おめえも矢部党かい」

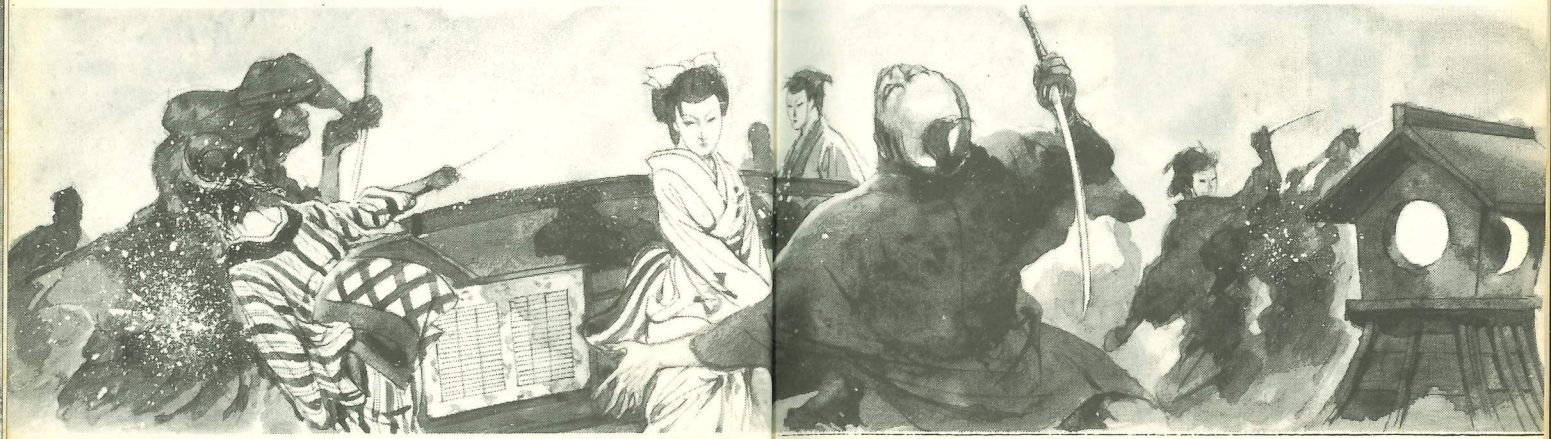
「鳥居さま　今宵相手の女　お気に召しましたか」
「フフ……」
「これは慶長大判です　どうぞお持帰りを」
「後藤どの　それでこのわしに何をさせるつもりだ」
「貨幣改鋳のこと　なにとぞご老中　水野さまにご進言を」
「印幡沼開鑿工事を悲願としておられる水野さまはその資金調達のため　いずれは貨幣改鋳を実行されるとは思うが　三右ヱ門どの　おぬしの金座からも　資金の一部を出してもらわねばならぬ…」
「承知いたしております　しかし　その金を捻出するためにも　是非改鋳を…」
―貨幣改鋳で調達金を上回る利益を得ようとは　三右ヱ門もこのわし以上に食えぬ男よ―
後藤の寮から帰る駕籠の中で耀蔵は三右ヱ門の脂ぎった顔を思い浮べていた

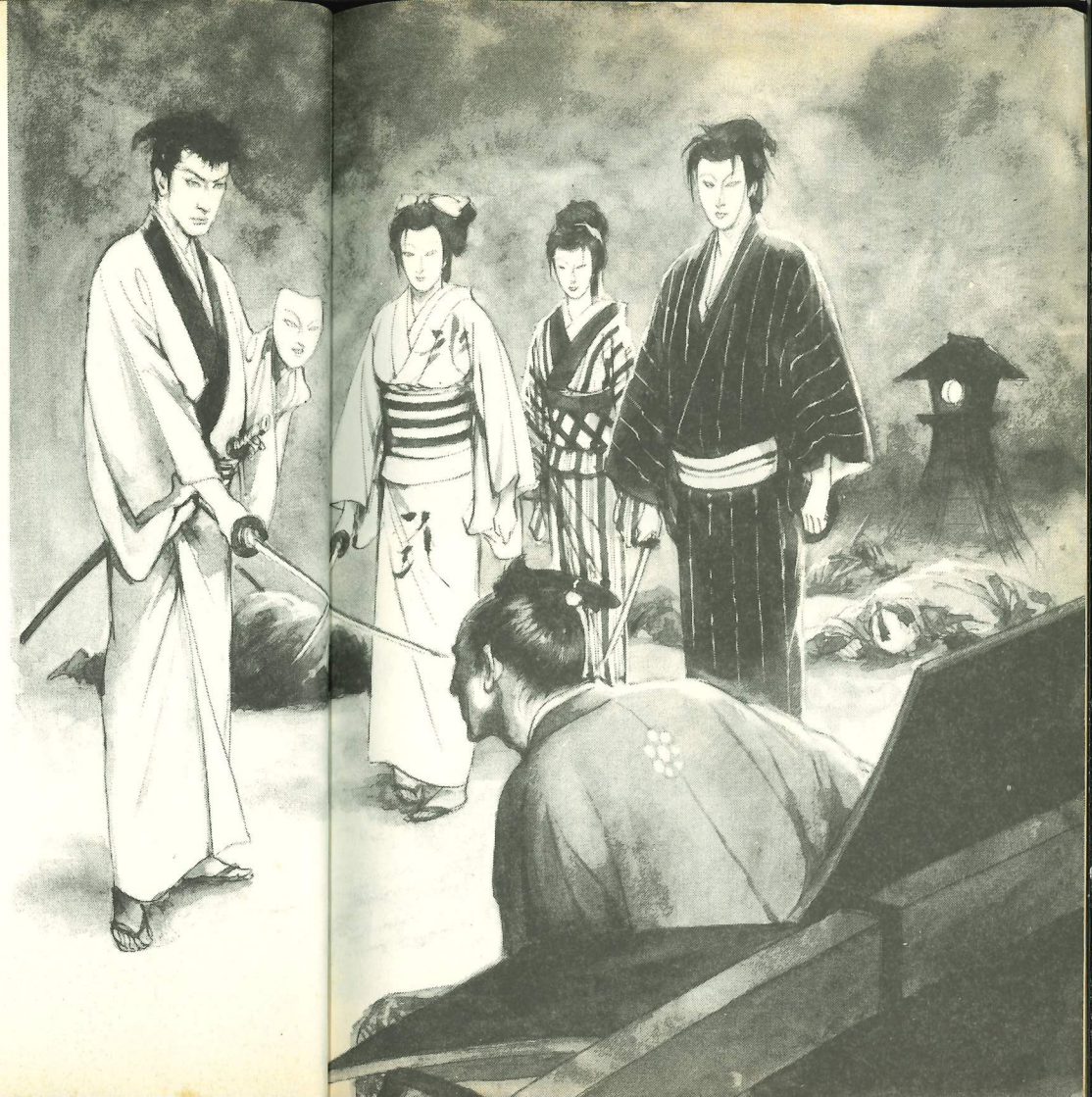


ドドドーン
突如　夜空を裂いて花火が
「む　何ごとッ!?」
改革の折　花火の打上げは禁令のはず
戸を開けて空を見あげる耀蔵の目の前に白刃が突き出された
「無礼な　何者だッ」
「無礼は承知の上だ」

ドドーン
再び打上がる花火　その明りに照らし出されて闇の中に浮び上った能面が四つ
「ぬ!?」

「曲者っ!」
忽然と現れた四つの影に　警護の侍たちが慌てて襲いかかる
ドドドドーン
花火の光芒の中に白刃が触れ合い血汐が舞った





「耀蔵　駕篭から出ろ」四ッの面は九十郎　お吟　お柳　新三であった
「耀蔵　この能面は　自ら炎の中に命を断った夕姫の怨みの面だ　きさまの出世欲のため命を落とした夕姫　矢部駿河守　そして俺の親父のための天誅の刃今ここで　その胸に突き通すのはたやすいが　あらぬ罪をきせられて　桑名藩松平家に幽閉の身になった駿河守さまは　きさまに恨みを残し　食を断って憤死された　その悔やしさを　これからおまえにもたっぷりと味あわせてやるから　思い知るがいい……」

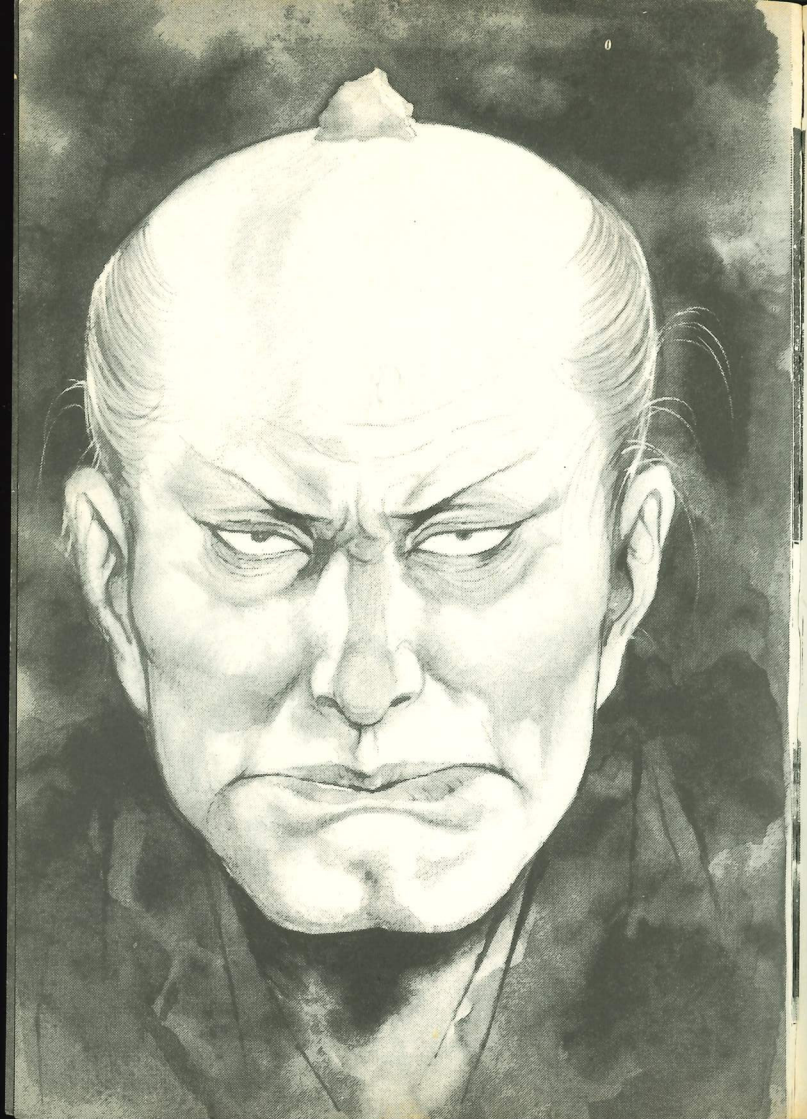
ドーン　ドドドーン　夜空を焦がす五彩の花
打上げ花火と思われたのは　実は花火の製造元両国玉屋市郎兵衛方からの失火で　火が花火蔵に燃え移ったためのものであった　地を震わす火薬の炸裂音と夜空に飛び散る仕掛花火　爆発に煽られた炎が忽ち町内に広がり　時ならぬ花火見物と火事騒ぎに両国一帯柳橋から日本橋にかけて　火消しや役人の出動　野次馬などで騒然たる有様　折しも将軍家慶は日光廟参詣に出立して　留守中のこの大事に　江戸の治安を預かる肝心の南町奉行の鳥居耀蔵が月番なのに　どこに居るのかその所在が分からない
「お奉行　お奉行はどこだ　お奉行を探せッ」

明け方近く鳥居耀蔵は今戸の瓦小屋の中で能面をかぶせられて後ろ手に縛られた　みじめな姿で　神崎甚内らに探し出された

「お奉行ッ　こ　これはいったい　何となされました!?」

「この縄を解け　早くッ　何をぐずぐず致しておるッ!!」

「弘化二年（一八四五）水野越前守　印幡沼開鑿工事失敗のため老中を失脚



つづいて鳥居耀蔵も罪を問われて丸亀藩京極家に預けられ幽閉の身となった
しかし
「おれは矢部駿河のように食を断って命を落とすようなばかなことはしないぞ
幕府のある限りいつか許されて　また要職に返り咲いてみせるのだ　おれの才
能をこのまま埋れさせてたまるか」
だが幕府は維新によって瓦解　耀蔵は三十年近い幽居生活の後　明治の世まで
しぶとく生きつづけて　この世を去っていった　まさに　妖怪の死にざまそのものであった

闇の家業人たちのその後の消息は知らない――

闇の絵草紙　必殺血汐舞

完

植木金矢／うえき　きんや

大正10年11月1日山形県に生まれる。伊藤彦造、志村立美の画風に傾倒。独学でさし絵を勉強。雑誌のさし絵及び劇画を描いて今日に至る。代表作「風雲鞍馬秘帖」「三日月天狗」「赤穂城断絶」「柳生一族の陰謀」「宮本武蔵」など多数。日本画「踊子・四季」の個展など数回。

闇の絵草紙　必殺血汐舞　激闘編

発行日●昭和63年5月23日　初版発行
定　価●500円
著　者●植木金矢
編集製作●サンケイ新聞データシステム自費出版編集センター
〒100　東京都千代田区有楽町2-2-1（ラクチョウビル）
☎03（572）6431
発　売●株式会社あき書房
〒170　東京都豊島区東池袋4-13-8
☎03（988）7228（代）
印刷所●㈲青文社

©1988 Kinya Ueki Printed in Japan
ISBN4-900428-18-3 C0179 ¥500E